
カオス・クロニクル

岡村 としあき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カオス・クロニクル

【NZコード】

N3140Z

【作者名】

岡村 としあき

【あらすじ】

MMOの黎明期はとうに過ぎ、数々のタイトルがサービスを終了してきた。サーバー統合。つぎはぎだらけのアップデート。放置されたバグ。このカオス・クロニクルもまた、混乱の時代にあつた。サービス終了目前と囁かれるMMOで、一人のベテランプレイヤーと一人の初心者プレイヤーが出会い。

* MMOの特性上、チャット内の会話を表現するため、文中には顔文字を使用しています。横書きでお読みいただくことを推奨します。

押し切れなかつたEnt er

一瞬の迷いが命取りになる。たつた一度のミスが原因で全てが台無しだ。そうならないように、ただただ最善をつくす。

秀麗な鎧を着込んだ金髪の若い男や、下着同然の派手なローブを着込んだ銀髪の若い女、2メートル近い体躯をした緑色の肌の大男。彼らの命を守ることが、ここでオレの役目。

田の前で火花が散る。薄暗い洞窟の中で、戦いが始まった。ロックアンントと呼ばれるモンスターの討伐……それが今回の仕事だ。

近隣の村人を襲う悩みのタネで、これを数体討伐すれば、村長からたんまりお礼がもらえるというわけだ。

アントの巣と呼ばれる洞窟は、入り口が人一人入るのがやっとだった。中に入ると中は迷路のように入り組んでいて、一度はぐれると死体で再会……なんてことになりかねない。

今回組んだのはオレを含め4人だ。鎧の若い男が、シュレン。エロイネーちゃんがマリアベル。大男がパックン。そしてオレ……エルト。

入り組んだ迷路を進むこと数分。大きな空間に出た。その直後だ。所々の穴という穴からアント……バケモノアリが湧いてくる。

シュレンが切り込む。盾を持つ左半身を前に出し、右手の剣で襲い掛かってきたアリの前足を切り落とし、そこに畳み掛けてきた別のアリの攻撃を左の盾でガードする。

しかし、次の瞬間そのアリは自分の頭を失っていた。パックンが左右の手に握った鉄のハンマーで背後から飛び掛り、頭を叩き潰したのだ。返り血にも似た粘液を顔に受け、パックンは笑う。シュレンのほうも、鎧を緑色の何かで汚していた。

横穴から沸いて出たアリに、マリアベルが火属性の中級魔法『ブレイズアロー』の詠唱を始める。マリアベルの足元に六芒星の魔方陣が発現し、彼女の掌からバスケットボールほどの大きさの火炎球が3つ放たれ、アリを焼き尽くす。

耳障りな『ギギギ』という音を立ててアリは灰となつて大地に還る。

今日初めて組んだ彼らだが、チームワークは即席にしても、うまくまとまっていた。

「3匹来た！ スリを頼む」

「わかった」

オレの出番らしい。オレには彼らの様に、強固な盾も無ければ、一撃必殺の技もないし、圧倒的な火力を持つているわけでもない。やれることはただ一つだ。

彼らのサポート。

対象の意識を数秒間奪うことのできる催眠魔法『スリープ』の魔法を使う。オレの足元にもマリアベルと同様の六芒星の魔方陣が発現する。

白い霧がアリ共を包み込み、意識を奪うことに成功。その間にシユレンの体力を回復するべく治癒魔法『ヒールライト』を唱える。

シユレンの体は白い光の柱に包まれ、傷付き、血がにじんでいた皮膚が即座に修復された。

「よし、あと一息で目標数達成だ！」

このチームのリーダーである、シユレンの掛け声で士気があがつた。パックンもマリアベルも、やる気をだきらせていく。オレはそれを後ろから冷静な目で観察していた。

ヒーラーであるオレまで熱くなるわけにはいかない。状況の変化を見極め、敵との適切な距離を保ちつつ、味方に絶妙なタイミングでアシストを入れる。生命線であるオレが無闇に前に出るわけにはいかない。

それがヒーラーだ。

シユレン達の活躍もあり、程なくして予定数の討伐が終わった。

討伐が終わったオレ達は、村に帰還すべくオレを中心に集まつた。帰還魔法『リターン』を発動させる。発動と同時に、一瞬視界が暗転し、景色がのどかな山村の風景へと様変わりした。

「おつかれ～、またよろ～～～」

「おつですー」

「おつかれへへ」

オレ以外のメンバーはそういう残し、パーティーを解散すると、村長の家へと報酬……クエストアイテムとお金を受け取りに行つた。

『またよろしく』。ディスプレイにそう表示された文字。あとはエンターキーを押すだけ。たったそれだけの事を、一瞬躊躇つた。

夕闇が空を支配しつつある午後5時。窓辺にまで闇の魔の手が伸び、室内は真っ黒だ。

学習机の上に設置したノートパソコンのディスプレイ……。そこには、青い髪の少年が映し出されている。

先ほどまで、動かしていたキャラクター……エルト。

エルトはあるで、プレイヤーと同じ様に面白くなさそうな顔をして、鋭い視線で空を見つめていた。そういう顔に設定したのは自分が。

しばらくエルトと同じ様に天井を見上げる。そして、キーボードを6回叩いた。

メッセージウィンドウには何も表示されていない。BackSpaceで消したからだ。

もう誰とも関わりたくない。彼らともこれつきりだ。ソロのほうが気が楽でいいし、時間に縛られずに済む。

足を引っ張るのも嫌だし、引っ張られるのはもつと嫌だ。

一匹狼でいい。

再び視線を天井に向け、イスの背もたれに全体重を預けると、大きく伸びをする。

席を立ち、パソコンの電源を入れっぱなしにしたまま、自室から出ると下の階へと降りていった。

まるで……ゲームからも逃げているみたいでなんだか嫌な気分になつた。

出会い系とターニングポイントなネタ師の初心者

カオスクロニクル。純国産MMOである。サービス開始から8年……日本のMMOの黎明期を生き続けたゲームだ。

美麗なグラフィックと6つの種族と8つの職業。プレイヤー同士が戦うPVPシステム。

当時のMMO業界に新風を巻き起こし、最盛期はサーバーが混雑しそぎて臨時サーバーメンテナンスが週に2・3度あった。

それから7年経った今は……サーバーも統合され最盛期の見る影もない。それまで月額制だった課金システムも、基本無料になり、プレイヤーの数は一時的に増えた。

育成も大幅に楽になり、新規プレイヤーが増加したのだが、それも一時のこと。無料になつた事で、低年齢層のプレイヤーも増加した。

彼らの中にはモラルに欠ける者も少なくなかつた。それが古参プレイヤーとの軋轢を生むのにそう時間はかからなかつた。

現金でゲーム内通貨を購入するリアルマネートレード……RMTや、ゲーム内のキャラをプレイヤーの変わりに育成する、育成代行が蔓延り、それに手を染める新規プレイヤーも後を絶たない。

そんな新規プレイヤー達がいわゆる『害プレイヤー』になつて、面白半分にPVPを初心者や低レベルプレイヤーにしかけ、低レベル帯の狩り場は一時、害と古参プレイヤーの死体が転がる戦場とな

つた。

それから1年。害プレイヤーの多くは飽きてしまったのか、姿を見せる事はなくなり狩り場は以前の姿を取り戻した。

M O Bだけのフィールド。静か過ぎるダンジョン。入場制限無しにいつでも入れるインスタントダンジョン。

それが、元の平和なカオス・クロニクルの姿だ。

ゲームに戻ってきたオレは、空を見上げながらふと思い出していた。CGで描かれた青空には雲の塊がゆっくりと現実世界さながらのように流れている。

時刻は午後9時。外は真っ暗だが、カオス・クロニクルの世界では昼間だ。日曜の夜。普通ならば、回線が込み合ってラグが多くなる時間帯なのだが、依然快適である。

パーティーマッチの画面を開く。まばらだが、いくつかパーティーメンバーを募集しているパーティーがあるらしい。「苦労なことだ。

とりわけ、ヒーラーが不足しているのか、ヒラ様募集中のコメントがよく目に付く。すると、案の定だ。

「”ビもつすー。今ヒマしてません？ よかつたら悪魔の森にでも行きませんか？？”

「”どうも。他のパーティに誘われちゃったんでまた今度お願ひします”

「 りよーかーい^ ^ 」

『 苦労な連中からたくさんのおいしー …… プレイヤー間同士で会話を
するウイスパー モードでラブコールが飛んでくる。そのすべてを同じ理由で断つて、うんざりしながらパーティーマッチ画面を閉じた。

興味本位で聞くべきじゃなかつたな。

インベントリを開いて、所持品の確認をする。すると、MPボーキョンが切れていたので買出しにいくことにした。念の為、自分の倉庫を覗いてみたがストックがなかつた。

シュレン達とクエを受けた村『オルティアの村』を出て、街道を一人行く。川沿いの道を歩いて、草原を走る。ここまで道のりで、他のプレイヤーとすれ違つ事はなかつた。

当然か。いまさらこんな死に掛けのゲーム……新規で一から始める物好きはまずいない。この当たりは低レベル帯ゾーンだから、プレイヤーよりもNPCの数が多いんだろう。

……快適だな。そう考えていると小高い丘の上に出て、田的地が見えてきた。

『 ハリの村 …… 通称、初心者村だ。カオス・クロニクルを始めたプレイヤーはこの村からスタートする。

基本的なチュートリアルを兼ねたクエストを受け、レベル15程度で外の世界によひやく繰り出せるわけだ。

ハリの村は、基本的にすべての物品が低価格だ。初心者が買いや
すいように値段が設定されていて、他の村に比べ2割ほど安い。

オレは、消耗品は週に一度ここに買いに来て、倉庫にぶち込んで
おくようにしている。他にも何か切らしている物はあつたかな？
とそう考えていたときだ。

珍しい。村の前で、ラグが起こった。

ラグの原因は目の前……それを見てオレは声をあげそになつた。
恐ろしい数のMOBが渦巻いていた。50くらいだろうか？ そ
れらが村から少し離れた平原でぐるぐると竜巻のようにうねつてい
る。

大量に集めて範囲スキルをブチ込むまとめ狩りだろ？ それ
とも、初心者を対象にしたMPK？

どちらにせよ、関わるつもりは無い。無視して村の入り口に立つ
た時。MOBの渦が突然散らばりだした。どうやら、渦中のプレイ
ヤーは戦闘不能になつたらしい。

いつたいどこのアホだと思って、そこに近づいた。

珍しい。素直にそう思つ。そして、納得した。

カオス・クロニクルには、6つの種族が存在する。ヒューマン。
エルフ。ダークエルフ。ドワーフ。オーク。フェイブ。

ヒューマンや、エルフなどは他のMMOでも良く見かける種族だ

が、カオス・クロニクルにはオリジナルの種族が一つある。

それが、フェイブ。

フェイブは、古代人が神と戦う為に作り出した人造人間ホムンクルスだ。ヒューマンの遺伝子を元に、エルフのビジュアル。ダークエルフの魔力。オークの力。ドワーフの器用さ。

それらを兼ね備えた戦う道具として、愚かな古代人が神様ごっこ の果てに生み出した最終兵器の一つである。

白く美しい肌に、流れるような銀髪。宝石よりも美しく輝き、闇の中でも不気味に光る赤い瞳。

ヒューマンの手足として、死すらも恐れない殺戮人形。ここまで語ればこの種族は最強なんじゃないか、とか考えてしまうが唯一にして最大の弱点がある。

寿命だ。所詮は古代人の神様ごっこ。凄まじいまでの戦闘力を持ち、死すらもおそれない彼らだが、その寿命はたったの20年。

というのが歴史的な設定で、ゲーム的な設定はというと防御が紙なのだ。

高い攻撃力、高い魔力、底を見せないMP。そして、あつてもなくとも同じ0に等しい防御力と、一撃食らえれば即死レベルのHP。

6回目くらいのアップデートで追加された種族で、追加当時はチート性能で右を見ても左を見てもフェイブ、フェイブ、フェイブ。

そして次のアップでネタに早変わり。今も、野良のパーティーでフェイブを使って紛れ込むと、即追い出される。

ネタ師か、初心者が、よつぱどの熟練者でなければ使いこなすのは難しい。そう。

オレの田の前で倒れているのは、フェイブの少女だった。

「おい、大丈夫か？」

蘇生魔法くらにはかけてやる。久しくお田にかかるといな」
エイブだ。

案外、大量にMOBを引いたのも何かのネタだったのかもしれないな。

しかし、30秒立つても、1分立つても返事は無い。離席しているのかも知れない。そう思つて、その場を離れかけたときだ。

「おんがい s mすっすしゅ」

「はあ？」

意味の分からぬ、初めて耳にする……いや、初めて田にした言語だった。SMとか言つてるからやっぱネタ師か、こいつ。

「おねがいします」

どうやら、单なる打ち間違えだつたらしい。

スキルアイコンから、蘇生魔法『リザレクション』を選び、フニイブの少女を蘇生する。

光の羽が上空から舞い降りて、少女は起き上がった。

それが、オレとこにつの出会いで、ターニングポイントだった。

フェイブナイト

「助かりましたあへへ」

フェイブの少女は立ち上がるやいなや、ソーシャル『喜ぶ』を使って、子供のようにきゅっきゅっと飛び回った。

キャラクターの真上に表示されている名前を見る。…… punpun321という名前だ。なんだこりや？ プンプンむんにーいち？ マジでキレる3秒前とかいう意味か？

「punnun321ですへへへ プンって読んでくださいね～」

ブンはそういうと一人で拍手したり、一人で泣いたり、一人で笑い始めた。もちろん、これもソーシャルによるものだが。『褒める』、『悲哀』、『笑い』を使ったんだろう。

「いや、驚いたよ。まさかフェイブのネタ師がまだ全滅してなかつただなんて」

「ブンはネタ師じゃありませんよお～～～ 頑張つてレベルを上げていたのです！ そしたら、まわりのモンスターさんがいっぱい寄つてきちゃつて……」

「どうやら、無闇にMOBの群れに突っ込んだ拳銃、大量にリンクさせてしまつたらしい。初心者によくありがちなミスだ。

「でも、助かりましたあ！ 蘇生ありがとうございますへへへ」

ブンは再び、ソーシャル『踊る』で一回転してみせる。ブンのシリバーの長い髪とワンピースの裾が優雅になびいて、銀色の妖精が草原に舞い降りたかのように錯覚する。

女フェイブはビジュアル面だけでいえば、女性キャラの中でもっとも人気が高い。

特に、カオス・クロニクルの女性キャラクターの装備は、露出が多く、ローブ系の装備などは下がミニスカートになっていて、スカルを使う瞬間カメラの角度を変えれば……見える。

女フェイブはエルフ並みの美しさを持ちながら、出ているところはけっこう出ているのだ。

ブンが装備しているのは、クエストでもらえる報酬アイテムの、グレードがかなり低いローブなのだが、白いワンピースのようになつていて、丈が膝上20CMくらいしかない。

それを纏ったブンが、さつきからやたらとオレの目の前で乱舞している。その度、危うい角度で聖域がこの不浄なる世界にさらされているのだが……後で注意してやるか。

とりあえず、このまま去つてしまつてもよかつたのだが、いくつか忠告でもしといてやる事にする。また村の前でラグ起こつても嫌だし、何度も『蘇生してください』なんて、ウイスが来たら鬱陶しい。

「オレはエルト。レベル44のビショップ……ヒーラーだ」

「『パンはレベル12のフェイブナイトです！ よろしくね、エルくんへへ！』

ナイト……フェイブナイト……レアだ。とりわけ紙装甲のフェイブに一番ミスマッチな職業の組み合わせ。

敵の攻撃を一手に引き受けるナイトは、パーティー狩りではとても重要な職だ。ヘイストスキルを使って、敵のターゲットを自身に集中させれば、ヒーラーにとつてもHP管理がしやすい。

高い防御力と、敵のターゲットを自身に向かわせるスキル。パーティーでは文字通り盾であり、壁なのだ。

それ故、どこのパーティーも必死にナイトを勧誘しようとするのだが、いかんせん数が少ない。敵のターゲットを集めると、それだけ死亡率が高いということでもあるからだ。

カオス・クロニクルでは死亡すると経験値が減少する。それも、20分くらい狩りをしてようやく取り戻せるくらいの量だ。パーティープレイには困らないが、それ以上にリスクが大きいので敬遠されがちな職業である。

それに……フェイブナイトは不遇職かつ、不人気職のナンバーワンで、ナイト募集のパーティーでも、『それならロープを来たヒーラーのほうがマシ』だなんて、冷たく言われてしまつ。

レベルが60になれば神スキルと呼ばれる『ヴァンガード』が使用できるのだが……そこまでマゾな奴はそういうない。

こいつは、何でこんなマゾいのを選んだだろ？……ふとパンを見

ると、いつの間にかM.O.Bの群れに突っ込んで、仲良く鬼ごっこに励んでいた。

しかも、さつきよりも数が多い。……あいつ、絶対何も考えずに外見と名前だけで選んだな。

チャットとキャラの操作が同時に出来ないらしい。急に立ち止まつたブンはボコスカM.O.Bに殴られて、悲鳴を上げて倒れた。その10秒後にさつきのセリフが流れたわけだが……。

それにしても……誰も「いと組」など思わないだろうな。初心者で、不遇職で、プレイヤースキルもないし、何も考えてない、チャットも遅い。……オレもこれ以上関わるのはよそい。

初心者に関わると口クな事がないのは、オレ自身がよく知つていいはずだ。それは一年前、嫌と言うほど思い知つただろう？

クソ……思い出すだけで……腹が立つ。

「パン。お前、ギルドは？」

リザレクションをかけ、再び蘇ったプンにそう問い合わせる。

パンはまた一回転して、ワンピースの裾を危うく舞わせると、おもむろに派手な紋章の入ったマントを装備して、じゅりに振り向いた。

「入ってるよーーへへ これがブンの所属しているギルド『灰色の狼』

のギルドマントなのだvvv ビツだ、マイッタか@@ミ

背中をひたひた回けて、ブンはさつさつた。

その小さな背中にくつ付いているマントの紋章を見て……マウスを握る人差し指が……一瞬停止する。

ギルドに加入したプレイヤーには、無償でギルドエンブレムが入ったマントが支給される。

ブンの背中には猛々しい狼の顔がドット絵で描かれていた。

「お前……『灰色の狼』のメンバーなのか」

灰色の狼はオレがプレイするサーバーで最大手のギルドだ。ギルドメンバーは常に100人以上いて、ヒリアボス討伐を独占したり、各職業ナンバーワンを決める『トーナメント』にその名を多く刻んでいる。

ギルメンは廃人二ート共がほとんどだ。さつき組んだパックンも『灰色の狼』のギルメンだった。

「ブン、それならギルメンに声掛けて育成手伝つてもらえよ。こんな所でソロなんかしてないでさ。手伝つてもらつたほうがすぐに転職もできるだ?」

後はギルメンさんに任せよう。元々、こいつに興味があつたわけでもないし、そもそもオレは、初心者支援の優しいベテランプレイヤーなんかじゃない。

だが、ブンはすぐに返事を返さない。

「……」

わざわざ沈黙をチャットにして表して、先をもつたいぶつてみせる。何が言いたいんだ、お前は？

キーボードの上に載せたFキーとCキーの上で、軽く指を動かし、苛立ちながら辛抱強く待つ。

「……」

数秒間を置いて、ブンが喋りだした。

「皆、忙しいから無理って言われたへへ； ギルメンなのに助けてくれないよーじつじょへ、エルくん……」

どうやら、ギルメンにも煙たがられているらしい。大手のギルドなんて、そんなものだ。勧誘するだけとして、あとは放置。

あとは各自、自由にギルメンと仲良くなってくれさいねー。とか言つてほつとかれる。周りにすぐに溶け込めるようならいいが、そうでなければ孤立してギルドに居場所は無い。

孤独なのだ……ブンは。

狩り場に行つても誰もいないから、同じレベル帯の友人もできな
いし、ギルドでは初心者扱いされて、半分バカにされているんだろ
う。

かわいそうと言えればかわいそつだが……。ボランティアで友達につこなんてオレはほんめんだ。

「ねえ、エルくん?」

フンがオレに疑問形で何かを問い合わせる。解つていన。その先の言葉は。オレに超能力はないが、その先の言葉は解る。

だから。

その言葉が出る前に。

フンよつも早くキーボードを叩いて。

その言葉を紡ぎ出す。

「一人でも大丈夫な狩り場、教えて! フンがんばって狩りうまくなるから^_^」

オレの言葉よつも早く、フンがオレの予想を裏切る言葉を紡いだ。

それでも、オレの心は変わらない。

すでにメッセージジウイングウには文字の羅列がセリフとなつて、Enterを押されるのを今か今かと待つている。

キーボードを操作して、オレはオレの意思をフンに伝える。

『彼女に送るプレゼント』

「あらがとうございましたあ」

能天氣そうなセリフを背中に受けて、村の道具屋から一歩外にでる。

道具屋の看板娘ホリーちゃんは、村一番の美人らしい。そう何度も村の警備員マーシーが独り言を繰り返しているので、これはプレイヤーの間でも有名な話だ。

クエスト『彼女に送るプレゼント』は、14レベルで一回だけこのストーカー警備員から受けれるが、その報酬が経験値と装備のセットなのでこれをやらない手はない。

内容も、一匹だけクエストモンスターを狩るだけでお手軽だ。

道具屋を一人出たオレは、倉庫に向かった。倉庫番のドワーフに話しかけ、消耗品をたくさんブチ込んでおく。

隙間なく押し込められたポーション類に、癒される。やつぱり、物がぐちゃぐちゃしている方がなんだか落ち着く。ちなみにオレは掃除が苦手だ。

今も部屋の床には色々物がちらばっている。両親がそれを見るたび溜め息をついて『片付け』といつるさい。余計なお世話だ。

いや、そんな事は今はどうでもいい。問題は別にある。

倉庫を後にして、村の堀にそつて外に向かつ。見えて来た。

ストーカー警備員マーシーが今もうつむいて、『ああ、ホリーちゃん……』とか、『今どうしてるんだろう、ホリーちゃん……』と、ホリーちゃんへの思いを募らせていく。

そのマーシーの前に、軽量の鎧に身を包み、剣と盾を持った銀髪の小柄なフュイブの少女がいた。

「クエ、ちゃんと終わつたか？」

「うん、ヒルくんのおかげだよー。ありがと'▽'」

ブンがオレに近寄つてきて、飛び跳ねる。子犬のような奴だ。

「レベルも15になつたから、違つ村に行けるね、やつたー^ ^」

「そうか、15になつたか。じゃあ、『ミロンの村』に行こう。うまいクエをいくつか知つてゐる」

「ほんと@ @ お世話になります、歸丘ミロ（――）ミペコフ

ようやくナイトになつたブン（装備だけだが）を背中に、ハリの村を出る。

田描す先は、ミロンの村……近くミロプリン前線基地といつ、少し難度が高めの狩り場がある。そこでこのつのレベルを上げる。

「ブン。ちよこまか動き回るな。アクティブモンスターを引っ掛け るぞ」

「ひやあ、助けて@@ー。」

前の前にすでにパンは何匹かのウハウアルフと戯れていた。本当に世話の焼けるお姫様だ。

それら全てを杖で呪きのめし、静かにわせた。

「うわあ、ヒルくん強いー！」

「いや……いくらオレがヒーラーとはいえ、レベル一のウハウアルフを倒すのは、高校生が幼稚園児に電気あんまをかけるような物だ」

小学生の時、一歳年下の弟にかけて泣かしてしまった事があったな、そういうえば。

「電気あんま（？ー？）」

パンが頭を疑問符でいつぱいにしている。

「なにそれ、楽しいの？ パンにもやつしてみて、ヒルくんへへ」

「ぐぐつてある。その上でやつてしまふことこのなう、オレの奥義を見せてやるわ」

「うわあーーーへへ」

パンは嬉しそうにはしゃぎながら街道をかけていった。……数引きのウハウアルフを引き連れて。まったく、世話が焼ける。

だが、それも少しの我慢だ。」いつがレベル40になれば……。
そうなれば、用済みだ。

オレはプンと一つの取引をした。

このゲームでは、レベル40未満のキャラと40以上のキャラは師弟関係を結ぶことが出来る。師弟関係を結んだペアには様々な恩恵がある。

一人がログインしていると互いの取得経験値が増加する。40以上は1・2倍。40未満は2倍になる。

さりに、ペアの片割れがレベル40に達成して転職を終えると、40以上のキャラ（この場合はオレが該当する）には、高価な武器が送られる。

オレの目的はそれだ。でなければ……。プンのような問題児を抱える気にはとてもなれない。

プンが40レベルにさえなればいいのだから、最初は適当に付き合つて、あとは狩り友を作らせて勝手に40になつてくれればいい。オレはそれまでログインしなくてもいいし、別のゲームで遊ぶか別のキャラでプレイして、プンが40になるのを待てばいい。

今だけの辛抱だ。プンの奇行に振り回されるのも、プンのお世話係をするのも、今だけの……。

「つておこ、プンー、どこ行った!?」

気が付けば、パンの姿はゼリにもなかつた。ゲームから落ちたか？

「エリだよおおお……」

ゼリからともなく、パンの泣きそつた声（本田6度田）が聞こえてくる。

カメラをぐるぐる回してようやくパンを発見すると、ディスプレイの前でオレは大きな溜め息を付いた（本田23回田）。

「お魚泳いでるキレイな川眺めてたら、落ちちゃった。てへ（^ - ^ * ）」

何がてへ（^ - ^ * ）だ。ふざけんな。またリザレクションか。

パンのHPは川に落とした時1になり、呼吸できずにダメージを食らい水死体になつて、ミロノの村の前の川を流れていた。

ディスプレイの前でオレは本日24回目の大きなため息を付く。

まだ時刻は午後10時になつたばかり……一時間でオレは24回もため息を付いたのか。

せつと40レベルになつてオレから卒業してくれ、パン……。

初めての狩り友

ミロンの村は海に面していて、小さいが港もある。村の前を流れる川はそのまま海に繋がっていて、プンは川で蘇生された後、泳いで海に出ようとした。

『お魚いっぽい取つてくるね、獲りたてはきっとおいしいよへりへじゅるり』などと語りて、犬搔きで大海原へ漕ぎ出したプンは、またもHPゲージがやばいことになっていた。

リターんを使って、強制的にミロンへプンごと帰還させる。即座に周囲は石造りの簡素な家が立ち並ぶ、閑散とした風景に早変わりした。

「エルくんのイジワル！ お魚はDHAがたくさん含まれてるんだよー お肉ばっかり食べてたらダメなんだゾー ふんふん♪♪

「お前はアホか」

プンがふんふん言い出したので、一蹴してやる。そもそも、このゲームに狩猟とかの要素は無い。

海中を行けば、たまに水中型のMOBと出くわすこともあるが、狩つたところで手に入るには経験値と少量の金だけだ。それにオレの食生活は野菜を中心だ。ピーマンは苦手だが……。

「プンはアホじゃないよー プンだもん♪♪」

意味が解らん。

けれど……確かにオレも始めたころ、ミロンの村の前で川に飛び込んだことがあつたな。その時、偶然近くにいたヤツも泳いでて……一緒に泳いだことが縁で狩り友になつて……色々な所に行つてバカをしたものだ。

世界が新鮮に見えた。目に映る全てが、キラキラ輝いていた。場違いなくらいレベルの高い狩り場へ迷い込んでしまつて、ザコMOBに瞬殺されたり、エリアボスと知らずに殴つたら、他のパーティーメンバーまで巻き込んで全滅したり……。

ブンもそうなのか。今のブンには、この死に掛けのカオス・クロニクルが、とてもキラキラと眩しい世界なんだ。オレにとつては……ヒマな時間を潰す、『ミニ箱みたいな所なのに……。

ブンもやがて思い知るはずだ。この世界は、自分が思つてゐるほどキレイなんかじゃないことに。

MMOと言つても、リアルと一緒になんだ。なりたい自分になんなれない。結局、ここにいるのは現実の自分だ。

それは他のプレイヤーも同じ。『人間』なんだ。『人間』は……残酷だ。昨日まで友達だと思っていたら、今日は平氣な顔して、裏切れるんだ。

だからオレは……誰も信じない。リアルもMMOも、信じられるのは自分だけ。他の奴らは、最後には敵だ。友達『』この果てにあるのは、残酷な結果だけ。

ブンにもそれを教えてやらなければならない。實際、ブンだって

ギルドに誘われておきながら、誰にも相手にされていないじゃないか。

「フンなら、解るはずだ。」

「つで、またか！ ディ行つた、フン！」

「二二二おおおおお…」

「なんと、すぐ真横からフンの悲痛な叫び声が聞こえるではないか。カメラを右に向けるが、そこには誰もいない。」

「フンは確かにそこに存在するのだが、石の壁以外何もない。すると急に、石の壁から人の顔が生えってきた。」

「うわああああーー？」

「壁にめり込んだじゃった、もひお嫁にいけない、つ…ぐすん」

「移動不可状態になつて、壁と同化していたらしい。再度リターンを詠唱し、フンを救出すると、村長からクエスト『ゴブリン討伐』を受けたが、当初の目的地、ゴブリン前線基地へと向かう。」

「村から歩いて移動すると時間が少しかかるので、テレポーターを利用することにした。」

「テレポーターは、少々お金を使うが、一瞬で狩り場や他の村に移動できる便利な機能だ。村の広場に突つ立っている若いヒューマンの女性がテレポーターだ。」

彼女の前に立つと、パンにゴブリン前線基地へのテレポート代を手渡し、移動する。

一瞬で田の前の景色が移り変わり、不気味な背景が画面いっぱいに広がっている。

BGMも、それまでのどかだつた村のそれから、緊張感のある、今にも戦いが始まりそうなRPGっぽいのに変わる。

前線基地と言つても、切り崩された岩山に木で出来た簡素で居住性のなさそうな小屋が数軒と、丸太を縦に並べただけの柵が周りを覆つているだけ。

所詮ゴブリンの巣である。MOBのHPもかつて高いほうではないので、楽に倒せる。

とはいへ、IJKをナメてかかると痛い目に合ひ。IJKのMOBはHPが20%以下になると、命乞いをしながら、小屋に逃げ出そうとする。

逃してしまつたら……その時は終わりだと思つたほうがいい。

数匹のゴブリンを引き連れて戻つてくるのだ。数は2か3と大したことは無い、問題は奴らの能力が他のザコMOBと一緒にを画しているという事だ。

その分、倒したときの経験値と獲得金額もバカに出来る量では無いし、高確率で装備アイテムをドロップする。

上級者の中には、あえてこれを狙う者もいる。だが、装備が貧弱

な上、フロイドの精神分析学だらけ。

そこで、オレの出番というワケだ。ターゲットを引き離すのは何も、ナイトのヘイトばかりじゃない。

ヒールライトを連発すれば、MOBの優先はヒーラーに向かう。ヒール系のスキルは敵対心を煽りやすく、無闇に連発すればヒーラーが襲われてしまうのだ。

そこを逆手に取る。あえてパンにヒールを連発してターゲットをオレに向かさせる。このレベル帯の攻撃なら、ロープ装備のオレでも十分に耐えられる。

その隙にパンに始個撃破せし、一気に成長する。ちとたりせつて
ている暇はない。明日また躍り。学校もあるし、一時こなしておき
たい。

「行くぞパン。オレについて来い」

「あい！　＠＠ゝ　なんだかエルくん、頼もしい。もしかして、エルくんて弟さんが妹さん、いるの？」

オレの後ろをぴょいぴょこ付いてくるパンが、無遠慮に質問を始めた。

「いるよ、一つ下の泣き虫な弟が一人」

「やつぱりー！ ハルくんて頼りになる優しいお兄さんって感じがしてたもん^ ^」

「違つよ、オレは

と、そこまで喋りかけて後悔した。基本的にオレはリアルを語らない。ゲームはゲームだ。ここは出会い系サイトじゃない。

相手のリアルにも興味がない。オレは、ゲームをしているんだから。

「ブンはね～。一人っ子なんだあ。いいな～兄弟へへ」

「そうか

「エルくんエルくん！　エルくんはどんなお仕事してるの？　ブンは高校生だよへへ」

高校生か。確かにそんな感じがするな。リアルのブンも、のほほんとしてて、天然なヤツかもしねりない。

「エルくんって落ち着いてるよね～@@　もしかして、30代の大人才つたりする！？　キャラーー渋い！」

「誰が30代だ！？　オレもお前と同じ高校生だよ。高校2年生だ、17歳だ。文句あるかコラ！　あるなら20文字以内で言ってみやがれ！」

しまった。ついつい熱くなつて個人情報を一部だが開示してしまつた。にしても、なかなか失礼なヤツだな、ブンは。

「えーーー@@ 同い年なんだ～エルくんってやつぱつす～いんだね。ブン、尊敬しちゃいます♪♪♪」

「どこに敬意を表す部分があるのか解らないが……やつぱこいつ、苦手だ。ベースを崩されると、行動が読めない。

「…………いいか」

ゴブリン前線基地はそれなりに面積が広い。入り口付近は比較的MOBの数が少ないし、レベルも低めだが、奥のほうに行くと、前述の小屋もあるしワンランク上のゴブリンも出てくる。

岩山の崖になっている所に、木でできたお粗末な小屋……その周囲には、6匹のゴブリン。当然、リンクする。適正レベルのプレイヤーが突っ込めばたちまちピンチだが、オレはその適正レベルから20以上高い。

ゴブリンの群れに突っ込んで奴らの注意を引き付ける。一斉に奴らから袋叩きに合つが、ダメージは一ヶタ台だ。

「よし、オレが引き付けている間にやれ、プン！」

「あい！　@{@}」

プンの装備している剣が、背後からゴブリンを切り裂く。数回の斬撃を繰り出すとゴブリンは力尽き、地面に倒れフェードアウトし、消える。

やはり、ナイトであってもフェイブだ。攻撃力は他の種族のウォーリア並みである。

瞬く間にプンは全てを平らげる。思ったよりもプンの火力は高い

らしい。これならレベル上げにそう時間はかかるないかもしない。

時間が経てば、すぐにゴブリンが出現するのだがそれだと時間が惜しい。別の場所から数匹引いてくるか。

そう思つて移動しようとしたときだ。

スピーカーから、戦闘音が聞こえた。剣撃のSEや、ダメージを食らったときのSEに、男の太い声。

「他にも狩をしているプレイヤーがいるのか」

「珍しいね@@」

ここからそう遠くない距離にいるようだ。そうだ。丁度いい。そのプレイヤーとパンと一緒に狩らせよう。一人が狩り友になつてくれれば、パンの育成をそいつに任せてしまえる。

「パン。一緒に狩りをする友達が欲しくないか?」

「欲しい——→→」

「なら、ちょっと行ってみよう」

パンを引きつれ、音の発生源のエリアまで行くと、そこでは緑色の肌の大男が巨大な剣を両手で振るい、ゴブリンを力任せに切り裂いていた。

「オーケだ。オーケウォーリアだな、あれは」

6つの種族の一つ、オークは非常に高いHPと高い攻撃力を持っている。特に近接武器を得意とするウォーリアとの相性がいい。

反面、足が遅く命中率も低いが少数の人間には好まれている。おぐの人間は、そのビジュアルで好き嫌いが分かれるところだらう。

かつこよくなれば、かわいいわけでもない。肌は緑色で、髪もスチールホールみたいに硬そうで、筋肉モリモリ。

はつきり言って、イロモノだ。だが、オーク間での友情は厚いらしく、オーク専用挨拶があるらしい。それくらい一部には人気がある。

「ブンもオークにすればよかつたのにな」

「えーー嫌だよ、かわいくないもん」

あのオークの大男がブンのよつなセリフをしゃべって、死にまくるとする。

……うん。蘇生してもう一回殺すな。オレなり。

「フェイブでよかつたな、ブン」

「@@"」

オークがその場にいた「ブリンを全滅させたのを確認して、オレは近寄った。

「すみません、もしよかつたらこの子と一緒に狩りをしませんか?」

オークは剣を構えたままの姿勢で硬直する。数秒間があつて、返事がきた。

「ねを。ぼくちん如きでいいんですかい？ レベルも低いし、装備もシラボーンですぞ（・・・）」

「じつちも似たようなものだし、オレが外部でヒールするんで気にしなくておく」

「ねを。ほんじゅお言葉に甘えて！ ぼくちんキラ・ヤマモトです、オークウォーリアのレベル21です。別のサーバーから移住してきました」

「へえ、何で？」

「PKギルドが我が物顔で狩り場占領するんですよ。ぼくちんのメインキャラだつたラクス・クラタや、アスラン・ザマもよく彼らの毒牙にかかり……『ロニーへの移住を決断したのです。地球の重力の井戸に引かれたままでは、ニコータイプに覚醒できないと思います』

……オタクかよ。

それにこのサーバー名、ロロニーじゃねーし。

「なんだか解らないけど、すこい理由があつたんだね@@@… うむうむ321だよ~ プンつて読んでね^~^」

ブンがヤマモトの前に出て、へんつと踊つて見せた。

「ぬお。フハイブの娘！ プンちゃんハアハア」

「ヤマモトおもしろいーこへへ めひしへー。」

またひらりと舞ったパン。ヤマモトは無意識であっちこっちにいつたつぱり、パンの周りをつまみながらしていた。

「何やつてんの、ヤマモトっ。」

「どのアングルが、一番ベストかなって、思っていいよねえ。つぶふ。中尉もそう思わんかね？」

「へへ？」

パンはヤマモトの変態行為に付いていられないらしい。あと、誰が中尉だ。

「この変態がー やつぱりお前はーーー あっちいへ、しつしー。」

「ぬお。変態とは失敬なー。僕は

ヤマモトのソーシャル『笑う』でオーケーの巨体が反り返り、豪快な笑い声がスピーカーを振動させ、部屋に響いた。

「ド変態だー！」

GMホールは慎重に

「変態と開き直ったヤマモト。むれ抜っこ、墨抜っこ、血抜っこ。
そして、今もなおパンの背後を動き回つてゐる。『変態の鑑のよつ
な男だ。

はつとめつて後悔してゐる。ヘタをいじり、パン以上に厄介な
存在かもしれない。

「やつぱこいや。他を逃たぬでわざわざ」

「いへじつ事は、やつとめつてしまつた方がいい。失礼だが、な
んとなく危ない香りがするのだ。」

「そんな！ ぼくちん、パンちゃんの為なら何でもやるよー。」

「やうだよ、エルくん。ヤマモトかわいやうだよーへへ」

パンの心は広い。ヤマモトに背を向け、オレに向き直るとソーシ
ヤルで、泣き始めた。そして、その後ろでヤマモトが座つて、『ブ
ンちゃんおパンツ鑑賞会 ハアハア』をビリビリと開催してゐる。

「ぬを。心優しき我が女神！ あれですか！？ あなたは死なない
わ、私が守るもの。でござりまするかー？ ぼくちん、パンちゃん
とシンクロ率100%オーバー！ パンちゃんに向ひて、ぼくち
んのHントリー・プラグ強制射出ー！」

最後のはトネタじやないか。もう我慢も限界だ、少し脅してやる。

「おいパン。GMコールだ。へんなプレイヤーに粘着されています、セクハラ発言で不快な思いをしているので対応お願いします。つてGMさんで伝えるんだ」

「はーいへへ」

その後に、『もちろん冗談だ』とパンにウイイスを送つておく。

「ねお、GMコール（。。）」

GM……たぶん、ゲームマスターという意味だと思つ。一言で表せば運営だ。不具合が起きたときの報告や、規約違反者を通報する時、GMにメッセージを送る。それがGMコールだ。

もちろん、本当に通報するつもりはない。パンだって、解つてゐはずだ。これは単なる脅し。

ちなみに、重大な規約違反者については、アカウントの停止や、最悪削除される場合もある。

「まあ、もちろんウソだ。だが、これ以上バカな事を書いて付きまとつなり」

「エルくん、終わったよへへ」

「ん？ 何がだ？」

「GMコールへへ 田の前に変態さんがいますへへ 私襲われそうで怖いです；； 捕まえてください！ つてGMさんにメッセージ送つておいたの」

「……」

「ガクブル（（。 。 ） ）」

「ブン、 やればできる子なんだよ。 いえーいへへへ」

「お前はアホか！ 本当にやるなんて何考えてんだー。 そもそも、
冗談だつてウイス送つておいたろうがー」

「えー————； あ、 ほんとだあ、 気付かなかつた。 あは。（
） 〇」

あは〇（ ）〇じやねーよ。

すると突然、 ヤマモトがフェードアウトして消えて行つた。 まさ
か。

「……噂で聞いたことがあるな。 規約違反してGMMに睨まれたら、
特殊なフィールドに転送されるつて……」

「え！ ヤマちゃん……！」 祈福を祈ります（ ^人^ ）

祈るな。

しかし、 また突然「つい縁の巨人が現れ、 豪快な笑い声がスピ
カーを振動させ、 部屋に響いた。

「ヤマちゃんふつかああああつー なんか回線の調子悪いみたいだ
つたけど、 直つた！」

回線が切れ落ちただけだつたか……。

「おかえりヤマモトちゃんへへノ プンにつぱい心配しちやつたよお
さつきまでい冥福を祈つていたお前はどうにいった。

「まあ、もうどうでもいいや。ヤマモト、あつちで一緒に狩り。
オレがMOB引いてくるから、ポンと同じのを攻撃してくれ」

なんだかんだで、貴重なポンと同レベル帯のプレイヤーだ。今日は
だけは我慢してやる。今日は。

それからさつきまで、ポンと一緒に狩りをしていた場所に戻ると、
ヤマモトを加えて再開する。

ポンだけでもお代わりが必要な状況だったので、周囲からありつ
たけを引いてくる事にした。他に人がいないのが、こうこう時は助
かる。

オレがMOBを引っ張る。ポンとヤマモトがそれを倒す。オレが
MOBを引っ張る。ポンとヤマモトがそれを倒す。それをかれこれ
20分は繰り返した。

その成果で、ポンは瞬く間にレベルが22になり、ヤマモトも2
5になつた。

ヤマモトの火力もまた相当なものだ。ポンと違い初心者ではない
ので、狩での立ち居振る舞いをよく心得ている。特にスキルを使つ
タイミングが絶妙だ。

「」のままレベルが上がつていけば、上級狩り場でも貴重な戦力として色々なパーティーから引っ張りだこになるだろう。

……これさえなければ。

「「「オレがガ ダムだ!!!!!!」」

「「「オレがガ ダムだ!!!!!!」」

「「「オレがガ ダムだ!!!!!!」」

「「「オレがガ ダムだ!!!!!!」」

「「「オレがガ ダムだ!!!!!!」」

「「「うぬせー」」

ヤマモトはどうやら、攻撃スキルを発動する際にマクロを組んでいるらしく、スキル発動と同時に、上のセリフがメッセージとして表示されるらしい。

他にも、『虎牙 斬!』とか、『オレのこの手が光つてうなる』とか、『分の悪い賭けは嫌いじゃない』とか言っていた。

何を言つて居るのか、さっぱりわからない、最後の一つだけは。

「しかし、戦つてゐるときのプロちゃんとかわゆす。ハアハア」

「ハアハア言うな、オタクが」

「エルくん、ハアハア～♪」

「パン、お前まで真似するな」

「中尉、ハアハア」

「エルくん、ハアハア～♪」

「ハアハア～！　あーもう、10分休憩！　オレ、飲み物取つてくるー。」

「こりゃ～♪

「あ、ほぐれん！」でいいよー。ストロー付けといてね、あと、おこしくなるおまじないも、かけてね」

ヤマモトひざえ。

席を立ち、足早に部屋を出て一階のリビングへと向かう。家族はもつ寝てしまつたらしく、コビングは真っ暗で誰もいなかつた。

時計を見ると、すでに一時を回っていた。もう少し狩をして、今日は終わる。

インスタントコーヒーの粉を愛用のマグカップに入れ、ポットからお湯を注ぎ、それをかき混ぜる。少し、冷ましてその場で一口呑む。

やはづ、「コーヒーはブラックに限るな。

マグカップを片手に階段を昇り、自分の部屋へと戻る。机の前にたどり着くとイスを引いて、『ほかない』よう『パソコンから離れた場所にカップをそっと置く。

「何だこれ……」

席に着いたオレはその光景に絶句する。エルトが……。ＨＰが0になり、戦闘不能になっていた。

オレ以外のメンバーは無事のようだ。離席しているのか、キャラが突っ立つたまんまで、虚空を見つめている。

急いでログを確認する。すると、1000を超える大ダメージを数発くらっていたことに気が付く。

バカな。このレベル帯でここまで強力な攻撃を仕掛けたM・O・Bはない。一体何が……。

その時だ。画面の端を何かが横切って行くのがかすがだが見えた。あれは……プレイヤー？

ダメージを一体誰から食らったのかを調べると、オレのキーボードを打つ手がかすかに震えた。

『斬魔』……。

PKだ。

PKとは、Player Killerの略称である。名の如くプレイヤーを殺すプレイヤー……Player VS PlayerのPKとは違う。

高レベルプレイヤーの一一方的な虐殺を差す場合が多い。

特にこの『斬魔』というPKは、1年前からずっと活動を続いている有名なPKだ。

種族はダークエルフ。職業はローラーで、レベルは60代後半。武器はデュアルダガー……両手に装備した一振りの短剣だ。一撃の威力は低いものの、攻撃速度とダガーによる必殺のスキル『デュアルスタッフ』は高いHPを誇るオーケーでも、一撃で戦闘不能にする事が出来る。

また、短時間だが姿を消すスキルもあり、気が付くと地面上に転がっているなんてこともある。

強敵だ。

それも、『斬魔』はPKギルドのギルドマスターで、うかつにPKをしようものなら、そいつの所属しているギルドに前面戦争を仕掛けてくる。

畜生……人が席を離れている間にPKとは……。

オレの頭には、先ほど淹れたコーヒーよりも熱く煮えたぎった血

液が駆け巡っていた。

いや……落ち着け。確か持ち物の中には完全に経験値を復旧させる『神秘の復活薬』があつたはずだ。ブン達にこれを使って蘇生してもらえれば、減つた経験値は取り戻せる。

とにかく今は…… プンとヤマモトを早くログアウトせらるか、村に帰還してもうつかない。

「お二、パン、ヤマモト、早くログアウトしな」

しかし返事は無い。まだ席を離れたまおらしげ。どうやね……？

「たつだいまー＼^_^／」

ブンが能天氣にも今帰つてきたらしい。

「あれ？ エルくん何してるの？」

「バカ！　PKされたんだよ、一回ログアウトしない。もたもたしてるとお前もやられるぞ！」

『わかつた^ ^』。そのブンのセリフが画面に表示されたのと同時に、短い悲鳴がして、ブンは地面に横たわった。

その後ろに立っていたのは、漆黒の塊。全身を黒いレザーアーマーに身を包み、黒い長髪を風になびかせ、褐色の肌の男が右手の短剣を構え、静かに立っていた。

斬魔だ。

そして、すぐに掛け声とともに画面から消えてしまつ。姿を隠し、一撃で仕留める……ヒットアンドアウェイの戦法を得意とするダークエルフローラグらしい殺し方だ。

「ヤマモト……こなならすぐログアウトしろ。」

しかし、ヤマモトからの返事は無い。このままでは、全滅だ。

「ぬを。何ぞこれー?」

「P.Kだ。早くログアウトしろ。20分後にまたログインしてくれ。その頃にはあいつもここを離れてこるはずだから」

「わかった。ぼくちんがP.KKしきゅやる! プンちゅんをこんなかしかりん格好にしたP.Kは許せん! ハアハア」

「やめろって! 相手はレベル60代のダークエルフローラグだぞ! 生き残っているのはお前だけなんだ! 神秘の復活薬を渡すからこれでオレを蘇生して!」

しかし、ヤマモトはオレの言葉を聞かずに飛び出していった。バカな事を……敵うはずがないのに。

ヤマモトが走っていた背後に、忽然と姿を表した斬魔。ヤツの体が光を放ち、足元に光が渦巻く。スキルが発動したのだ。

『デュアルスタッフ』が。

しかし、スキルは失敗してしまつたらしく、ヤマモトのHPは1

ミツも減っていない。ヤマモトはそれを実力差と勘違いしたのか、振り向くと大剣を頭上高く掲げ、それを一気に斬魔へと振り下ろした。

だがしかし、その攻撃は虚しく空を斬る。今度は横からの一難ぎ。それも軽くかわされてしまつ。

斬魔が消える。ヒツヤヤマモトは背後に振り返りデュアルスタッフの一撃に備えようとする。しかし 斬魔が姿を現したのは、ヤマモトのアモル後。

つまり、もともとヤマモトのアモルがいたのだ。

斬魔がヤマモトに攻撃を仕掛けた。スキルではなく、通常攻撃に切り替えたらしい。獣が吼えるような、双剣による連撃。息を付く暇すら与えない。

しかし、ヤマモトはそれに耐える。まったくHPが減っていない。

……減っていない？

注意深く斬魔の両手を見てみる。ヤマモトのHPが減らない理由がすぐに解った。

素手だったのだ。斬魔は、最後に残ったヤマモトをすぐアモルよりともせず、遊んでいるのだ。

「てめえ！ ふざけんじゃねえぞ！」

激昂したヤマモト。通常のチャシトではなく、ヒリアー帯に響き渡る、シャウトでアモルを殴る。

なおも素手で殴り続ける斬魔。ヤマモトはその斬魔を攻撃しようとするが一向に当たる気配を見せない。

当然だ。40近いレベル差に加え、オークの命中率とダークエルフの回避率。分が悪い所の話では無い。相手が悪すぎる。

「……オレがガダムだ！！！」

ヤマモトのスキルが斬魔に襲い掛かる。奇跡的な確率で命中した那一撃は、斬魔にとっても予想外のことだったらしい。

急に素手で殴るのをやめると、双剣を装備して音も無く消える。

そして次の瞬間にはヤマモトの大きな体が崩れた。

「キモオタザマアwww テラワロスwww」

斬魔がソーシャルで笑う。そして、シャウトでそう言った。

「ちくしょう……」

ヤマモトはそのままぐく。完全に遊ばれた上に瞬殺された。だから……やめると言ったのに……。

斬魔はすぐここを去り、不意にヤマモトへと向かつて歩き出した。

そして、ヤマモトの死体の前に立つと、その上に座り込んだ。さり、ガラクタやゴミアイテムをヤマモトの周りにバラ撒いて、周

囲を埋め刃べす。

「リリは縁の『//』箱。あーくつむ。『//』は、『//』箱に捨てやう俺様
ソコグリード」

「くそ」

PKは……最悪だ。オレも今は手も足も出ない。……不意打ちでなくとも、オレだって一撃でPKされてしまつだらう。

せつかく積み上げた経験値も、狩り友と過ごした楽しい時間も……ここからは平然と踏みにじつて、その上に唾を吐きかけて嘲笑う。

オレの視線はリストートボタンに注がれていた。エルトでは勝てない。けれど……あいつなら……。『本当のオレ』なら……こんなヤツ、簡単に……。

リストートボタンにカーソルを合わせた時。白い小柄な少女が、斬魔の背後に立っていた。

誰だ？

「ママちゃんをこれ以上いじめるな」

ブンだつた。

隣を見ると……戦闘不能で横たわっていたはずのブンがない。まさか、こいつ……蘇生を……経験値の復旧をあきらめて、村に戻つたあと再びここに……戻ってきたのか。

「www」

ブンが斬魔にしかける。しかし、当たらない。

「フュイブつてwww ちよおまwww」

斬魔は依然座つたままである、それでも攻撃が当たらない。だが、ブンはそれでも無意味な攻撃を繰り返す。

「ネタやんwww しかも、灰色の狼つて。これは戦争やなwww」

斬魔はやれやれと言つた感じで、起き上ると姿を唐突に消した。

ダメだ。早く逃げるブン。お前の安っぽい友情だか正義感で立ち向かつても、どうしようもないんだ。だから、もうやめる。

そして、再び姿を現した斬魔。

ブンは背後を取られて。

斬魔が吹き飛んだ。

吹き飛んだのだ。

斬魔の背後にいた、銀髪の白い素肌をした赤い目の中年青年に。

フュイブナイト。フュイブナイトの青年である。

「@@?」

パンは何が起ったか理解できず、その場に立ちつくす。

斬魔が体勢を立て直し、フェイブナイトの青年の姿を認めると、
ターゲットを変更し、そちらに向かう。

フェイブナイトの青年も、斬魔に向かつて走り出した。

……ムダなことだ。

あいつには、勝てない。

フェイブナイトの青年はヤマモト以上に巨大で凶悪そうな剣を構
える。

斬魔は、馬鹿の一つ覚えのように姿を消して、青年の背後へと回
り込もうとする。

フェイブナイトの青年の足元に光の渦が巻き起こり、それが全体
に行き渡る。

そして、その刹那に姿を現した斬魔が間髪入れずにデュアルスタ
ップを叩き込んだ。

しかし、青年には何のダメージもない。ヤマモトの時のようにス
キルが不発したわけではない。確かに命中していた。

だから、斬魔はあいつには、勝てない。

「パン。よく見ておけよ……あれが、このサーバーで最強のナイト
……フェイブナイトの棟もみじだ。そしてあれが、60レベルで覚えるフ

エイブナイトの神スキル、ヴァンガード……』

桟、舞う

ヴァンガード。確かに英語で前衛っていう意味だったと思う。

このスキルが神スキルである理由は、フェイブの特性と関係している。これまで何度も触れてきたようにフェイブは他種族よりも飛びぬけた攻撃力を持つている。

それは、近接物理職で一番攻撃力の低いナイトですら、他種族のウォーリア以上の攻撃力を持つ。

しかし、最大の弱点が打たれ弱さだらう。それを克服するのがヴァンガードである。

ヴァンガードは、スキルを使用したプレイヤーの攻撃力と防御力を入れ替えるスキルなのだ。

仮に攻撃力2300 防御力 560なら、それが攻撃力560
防御力 2300となる。

このスキルはトグル型……ようするにスイッチのように、オン・オフする事が出来るもので、リアルタイムに使用することができる。桟はこれを絶妙なタイミングで、攻撃の瞬間にオフにし、防御の瞬間オンにすることができる。はつきり言ってかなり面倒というか、細かい作業であつたりする。

そのお陰か、1年前から『トーナメント』で勝ち続けており、現在ではナンバー1の地位にいる。

その桺が……田の前にいる。

何故ここにいるのか？ 理由は簡単だ。斬魔がプレイヤーを狩るPKなのに対し、桺はPKを狩るPKKなのだ。

おそらく、この辺りに網でも張っていたのかもしれない。斬魔に対する個人的な恨みを持つものは少なくないので、斬魔を見かけたという情報を誰かが桺に流した可能性がある。

不意に斬魔が動いた。ヤマモトの時と同じ様に姿を消し、桺の前に現れる。桺はすぐさまヴァンガードを開。嵐のような斬撃を大剣で受け止める。

桺はナイトでありながら、盾を持たない。その代わりに武器の中で一番攻撃力の高い、大剣を装備している。これは、ヴァンガードの恩恵を大きくするためだろう。

オレは一人が戦っている間に、ブンに神秘の復活薬を渡して、蘇生してもうひとつ、すぐにヤマモトにリザレクションをかけた。

再び視線を彼らの戦いへと移す。斬魔が押されている。ヴァンガード状態の桺に傷を付けるのはそう容易いことではない。あとは時間の問題だろう。

再び斬魔が消える。桺は不意打ちに備える。しかし、5秒経つても10秒経つても奴の姿は現れない。

「あ！ エルくん下見て！」

「ブンの言うとおり、崖の下を見ると逃走中の斬魔の後姿があった。
……逃げたか。

「ブン、ちょっとあの人にお礼言つてくるねへへ」

ブンは戦いが終わり、大剣を背中に背負い、戦闘状態を解除した
桺に駆け寄った。

「助けてくださいありがとうございました」

早速、打ち間違えたらしい。

「いえ、別に。PKを潰すのが趣味なんですね」

桺は素つ氣無くそう答える。

「強いんですね、ビックリしちゃいました@.@」

「俺なんか……大したことないですよ。カインさんに比べたら……」

「カインさん（？）（？）」

「ああ、初心者的人ですか？ なら知らないのも当然ですかね。力
インさんは、一年前までこのサーバー最強のナイトだった人です。
俺も初心者だった頃、色々お世話になつたっけ」

「へえ、その人。今はどつしてるんですか？？」

「一年前くらいに……ちょっと事件があつてね。それが原因で突然

誰にも言わずに引退しちゃったんですよ。今はビーフしてこむのが…

…」

桜は、背中を向けこの場を去つてゆく。

「斬魔がまた別の狩り場に現れたようなので、行きます。狩り…頑張つて下さい。それでは」

次の瞬間、桜の姿はそこには無かつた。

「あの人、すつゝ〜〜強かつたね@#@# プンもあんな風になりたいなあ〜〜〜〜」

「ぬを。パンちゃんの好意がさつきのフュブ男に向かっている！？許すまじ、あの男め！」

ヤマモトのほうも、落ち着いたらしく、田の前で桜が仇を討つてくれたこともあるのだらけ。……逃がしてしまつたが。

「あれれ。そういえば、ヒルくんつて桜さんと知り合ひだつたの？桜さんの事、詳しかつたみたいだし@@」

「別に。このサーバー最強のナイトの情報くらい、ベテランならみんな知つてるさ。桜はPKKとしても有名だしな」

「ふーん、そなんだあ。。」

桜が消えた方向へとカメラを向ける。

ふと、思い出す。あの日、オレの前で装備も何も付けず、スキル

の使い方をまったく知らずに狩をしていた、一人の初心者プレイヤーの事を。

……強くなつたんだな、桜。

目覚め リアル

桜が去つて、数分後。日付が変わつてすでに午前0時10分。オレ達は今日はもう、狩りを終えて解散することにした。

リターンを使用して、ゴブリン前線基地から一瞬でニロンの村へ。村の広場で輪になつて別れの挨拶をそれぞれ告げる。

ヤマモトがうなつた。社会人だったのか、こいつ。もう少し落ち着いてもらいたいものだ。

「ヤマハん、がんば^ ^ b」

早く寝ろ

「あ～い。そんじゃ、プリンちゃん、中庭おやすね～」

ヤマモトの姿はすぐに消えさせ、広場に残つたのはオレヒソンだけになる。

「エルくん。ありがとねー！ プン、今日だけでレベルが9も上がるよ！」

本来ならば10上がったはずなのだが、斬魔にPKされたお陰で
ブンのレベルは一つ下がってしまった。

「明日もまたじぶね」

明日……こや、今日の事か。インするわけがないだろ。お前に
はヤマモトとこう、頼りになる狩り友ができたんだ。

「これ以上オレを……振り回すな。

「オレは、今日用事があつてインできなー

「じゃあ、明日だねへへー！」

「明日も用事がある」

「じやあ、明後日へへー」

「明後日も用事がある」

「明々後日も用事がある」

すると、急にパンから返事がなくなつた。沈黙する」と3分……。
そのままログアウトしてやるつゝかと思つたが、不意にパンが何かし
ゃべりだした。

「「めんね、ちよつとギルダチャットで夢中になつてた

オレの事は無視してギルメンと仲良くなっちゃべりか。

「まあ、やうこい」だから、しばらへじへじへログインできない
んだ。なんだつたら、ギルメンに声掛けてみりよ。あつとお前の
育成手伝ってくれるって

「無理だよ」

「は？ 無理ってことないだろ？」

「消極的な奴だな……。もう一言いってやるか。しかし、オレの言葉はブンの一言で遮られる。

「だつて……ブンのギルド……もうないから」

「え？」

「追放されちゃったへへ； ブンが斬魔つて人に攻撃したから、それを理由に戦争を仕掛けるつていわれたらしいの」

あの時か……斬魔も確かにそんな事を言つていたな。

「だから、戦争を起こさないためにブンを追放するんだつて。じょうがないよね。みんなに迷惑かけたくないし。ブンが抜けてみんなが喜ぶんだつたら、しちがないよね」

あの斬魔がそれくらいで引き下がるとは思えないが……これが、今の灰色の狼のやりかたか。変わったんだな。

「だからね、ブン、もう一人だよ。でも、エルくんがいるから平気

^〇^」

「厄介な事になつた。狩り友ができるとはいゝ、ヤマモトは社会人だ。そうなれば、学生であるオレ達よりもインする時間は短いし、平日は夜くらいいだろ？」

となれば、同じ学生であるオレを頼つてくる頻度が非常に高い。ギルドすら抜けてしまつたブンに、もはや知り合つことはオレかヤマモトだけだ。

オレは一人がいいのに……。このままでは、ブンが40レベルになるのが遠ざかつてしまつ。他にも狩り友が必要だ。

くそ……仕方がない。もう少し付き合つてやるか。

「ブン」

「？」

「明日の予定なんだけどな、オレの見間違いだつた。明日はなんとかインできそうだ」

「やつたあ　　」

ほんの少しだけ……だけどな。以下の目標は、こいつに狩り友を作ること。オレがいなくても、一人で野良のパーティに行つたり、ソロできるだけのプレイヤースキルを身につけてもらひ。

問題山積みだな……。

「じゃあ、寝るな。ブン、お前もさつと寝ろよ、遅刻するぞ」

「おやすみ、エルくんへへ」

オレは、ログアウトした。

PCの電源を落とし、ベッドの上に頭から突つ伏する。すると突然眠気が襲い掛かってきた。

……風呂は朝起きたら入るわ。

それにしても、厄介なことになつたな。pum pum 321……リアルはどんな奴なのだろうか？

一度、顔を揉んでみたいものだ。

そんなことを考えているうちに……オレの意識は闇の中へと沈んでいった。

* * * * *

眠い。これは相当に眠い。昨日、夜遅くまでゲームをしそぎたせいか……。

学校の自席で、俺は何度もあぐびをかみ殺した。なんとか遅刻せずに済んだものの眠気が何度も俺を襲つてくる。

季節は9月。夏休みが終わって、今だ休み気分が抜けきらないクラスマイト達は、朝から元気いっぱいでのるさい。少しその元気を分けていただきたいもんだ。

と、まどろみながらそんな事を考えていると、チャイムが鳴つて担任が教室に入ってきた。

朝の挨拶と、連絡事項の確認。ホームルームも終わり去つていくのかと思いきや、唐突に教室の扉を開けて、外に向かつて手招きをしている。何だらうか？

クラスメイト達は皆、扉に注目する。そして、そこから一人の女子生徒が顔を出す。

同時に、クラスの男子生徒どもは、歓声をあげる。もちろん、俺もだが。

ゲームで例えるなら……カオス・クロニクルで例えるなら、エルフ。涼しげな眼差しと、柔らかいシルクの様な肩甲骨あたりまで伸びた髪。チョリーピンクの唇から紡ぎ出されるのは、どのよつな声なのか。

日本人形の様な美しい顔。胸も……適度に大きい。美少女だった。

「えっと……相羽 真理奈です。親の仕事の都合でこの近くに越してきました。転校してまだ右も左も解らないので、助けていただけると嬉しいです」

転校生……相羽 真理奈。担任からの紹介と自己紹介を終えると、彼女はそよ風のよつに優しい歩調で歩き、指定された席へ……俺の右隣へ舞い降りた。

「よろしくね」

柔らかい微笑み。微かに漂う石鹼の香りが鼻腔をつき抜ける。まるで、夢を見ているようだつた。

「あ、俺。渡辺

翔^{ショウ}

これからようじへ

120円の転校祝い

なんとか自分の名前を言えたが、俺は内心かなりどきどきしていた。こんなかわいい子が俺の隣にやつてきた。どこぞのギャルげじやあるまいし、まだ俺は夢を見ているんじゃないとも考えてしまつ。

「そりと右へと視線を向ける。ホームルームを終えた教室は、一時間目までの僅かな間に少しでも相羽さんと仲良くなつてやろうといつ下心丸出しの男子と、自分達のグループに引きずりこもうと画策する女子達で人口密集地となつている。

転校生といつのは、それだけで話題性があるものだ。それもこんな美人じや、話しかけたくなるか。だが、俺にはお隣さんというアドバンテージがある。

何も焦ることは無い。

話しかける機会なんていくらでもあるや。わざと見て、再び右へと視線を向けると……。

相羽さんの横顔を偶然視界に捉えることが出来た。

違和感。そうだ、些細なことなのだが……そこに違和感を感じる。

すぐ右には、こぎやかなクラスメイト達を絵に描いたような光景があるのに、その中心の相羽さんは楽しそうじやない。

口は笑っているけども……目が笑っていない。

どれだけ価値があるのか解らない、ダイヤモンドのような輝きを放つキレイな瞳は、何も写していない……そんな気がした。

やがてチャイムが鳴り、クラスメイトはすぐに自分の席へと戻るため散っていく。そして、唐突に訪れた静寂。

相羽さんは緊張しているのかもしないな。転校初日に一気にこんなに話しかけられたら、ウンザリしてしまつかもしれない。そしておいてあげるのが、一番なのかも。

やがて、一時間目の授業が始まり……一時間目、三時間目、四時間目が終わって、昼休みになった。

俺は席を立ち、学食に向う。

「ナベ！ 学食？ 僕も僕も。一緒に食おうぜ」

クラスメイトの一人が俺に話しかける。そつそ、俺のあだ名はナベとか言われてる。一時俺の事をオナベとか冗談で言い出した輩がいたが、そいつにはデュアルスタッフ（割り箸でだが）を決めてやった。

ナベとオナベじゃ意味が全然違うだろう。

数人のクラスメイトと一緒にじやれ合いながら学食へと向う。適当に空いている席を見つけてそこを拠点に、半分を食券係りにして半分を拠点防衛に当たらせる。

俺と稻田というクラスメイトが席に残り、他の奴らを待つことに

なつた。

「なあ、相羽つてさ、この前お前が貸してくれたエロDVD出て演してた、AV女優に似てない？ いや……この前のエロゲーのヒロインかな？」

自称エロゲー博士。通称歩く下ネタ製造機。それがこの稲田 大河という男であった。当然、クラスの女子からは嫌われている。

運動系の部活に入っているでもなく、スポーツ刈りでメガネをかけたその風貌は地味という言葉がピッタリと似合つ。

「ナベはさ……もう見たの？」

「何が？」

「相羽のパンツ」

赤面しそうになる。こんな学食のど真ん中で、パンツ見たのとか、ありえない。

「見るわけねーだろ！」

見たいけどな。そんな機会があるもんなら。

ちなみに、稻田は純白が好みらしい。クマさんも捨てがたいらしいが……まるで健全な男子高校生の鑑の様な奴だ。もちろん見習つつもりなどないが。

……俺はしましまがいいな。

その後、稲田を放つておいて俺とクラスメイト達は昼食を済ませると、それぞれ学食で別れて昼休みの余暇を過ごすことになった。

俺は学食の隅にある自販機へと向かい、カフェオレでも買つこととした。財布の中から小銭を取り出し、一枚一枚入れる。

ボタンを押そうと手を伸ばしたとき、石鹼の香りがたちこめた。この香りには覚えがある。そう、彼女だ。

相羽さんが隣に立っていた。彼女は一体、何を買おうとしているのか。普段なら、クラスメイトの女子が青汁を飲もうがプロテインジュースを飲もうが知ったことでは無いが、今日は特別気になつた。視線は彼女に向けていないので、気付かれないはず。そつと、慎重に。隣に視線を移す。

不意に俺の指先に何かが触れて、ガコン。と音が鳴る。足元の取り出し口を見ると、黒い缶が吐き出されていた。

「……あ」

間違えてボタンを押してしまった。しかも……缶コーヒーのブラックだ。

まずつた。今日はブラックという気分じゃない。少し甘いカフェオレが飲みたかったのに……。

「それ、どうしたの？」

と、ふと隣から小鳥のさえずりが聞こえてくる。

「あ、相羽さん。いや……間違えちゃって。困ったな、俺、カフェオレ飲みたかったんだよね。もう一本買つか……」

「ちょうどい

「え？」

「私、ブラック好きなんだ。コーヒーはブラックしか飲まないから意外だった。女の子がブラック飲むのって、俺にとつてはちょっと意外だ。素直に尊敬した。

なんか、大人っていう感じだ。

「あ、うん。お金はいいよ、転校祝いにあげる！」

「ほんと？ えーと……渡辺くん？ だつたよね？ 転校祝い。ありがたくいただくな」

微笑んで、缶のプルタブに白い指が触れる。今、俺は思った。

プルタブになりたい。

そして、黒い缶が……チヨリーピンクの唇に……吸い寄せられ。

触れる。

直後、黒い液体が俺のコーヒーが……彼女の中に進入する（この表現工口いな）。

苦々に顔をしかめるでもなく、おいしそうに飲み干す相羽さんの顔には、幸せといつ字が顔に書いてあるといったような満面の笑み。天使だ。

今、俺は思った。

「コーヒーになりたい。

「転校祝い」がやつれま。また教室でね、渡辺くん」

そつと「△△箱に缶を捨てた相羽さんは、まるでテレビのコモロノの消音ボタンを押したかのように静かに音も無く去っていった。まるで、風のよつ」。

俺はそつと願った。120円の転校祝いが、恋の始まりになりますよつこと。

田 標を持つことは、ステキな男性への一歩？

突如俺の願いを遮るように稻田がやってきて、田の前の「ミミ箱」に
おもむろに右手を突っ込んで黒い缶を取り出した。

「ふひひひ！ ナベ、悪いがこいつは俺がもらつ。相羽の飲んだコ
ーヒー……」

稻田は気持ち悪い笑みを浮かべながら、学食を去っていった。缶
をどうする気だ。

ちゃんと書いてやるべきだつたか？ 学食の自販機の横には「ミ
ミ箱」が一つある。うち片方には先ほど相羽さんが捨てた缶が入ってお
り、もう片方には柔道部3年生の佐藤先輩……身長1・9メートル、
体重0・12トン。マウンテンゴリラ佐藤の異名を持つ、彼が飲み
干した缶が入っていたのが……どんな味だったのか、後で稻田に
聞いてみよう。あいつには相応しい末路だ。

学食から教室へと帰還すると、自分の席に着くとしたら生徒の
山ができていて、それは不可能となつた。

相羽さんを中心とした人の渦は、楽しそうな笑い声を教室に振り
まき、それに参加しなかつた者は教室の片隅で暗く寂しく一人の時
間を過ごしている。

邪魔だな……こいつら。だいたい、相羽さんにそんな付きまとつ
たら迷惑だろう。彼女の気持ちも考えてあげるべきだ。

溜め息を付いて手近の空いてる席に腰を落ち着かせ、会話の内容

に耳を傾ける。

「相羽さんって彼氏とかいるの？」

早くもプライベートに突っ込んでいる奴がいるな。いいぞ。もつと聞きます。

「いなーよ

相羽さんは、はにかんだような声で、恥ずかしそうに答える。ついでに誰か好きな異性のタイプも聞き出してくれるとありがたい。

「じゃあじやあー、どんな男の子がタイプ？」

「マジメな人かなあ。しっかりと目標を持つていて、それを最後まで成し遂げる強い意志を持つた人」

むむ。マジメというのは、俺にピッタリと当たる。目標を成し遂げる強い意志……か。

とりあえず、投げっぱなしにしていたジグソーパズルを帰つたら完成させよう。

と、そんな事を考えていたら昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴つて、人の渦はバラバラと散つていった。

その後、5時間目と6時間目を終え、今日一日の授業が全て終了する。

ホームルームが終わると、相羽さんは女子数名に連行され、教室

から出て行つた。カラオケに行くらしい。

俺も誘われたが、今日は用事があるので泣く泣く見送つた。相羽さんの歌……聴きたかった。

何を歌うだろうか？ もしかして、アニソン？ アニソンとか歌わせたら、萌えるな。ああ、行きたい。けど、行けない。

俺は、教室から去つていつた彼女の後姿の残像を目に焼き付けたまま、我が家へと帰宅した。

* * * * *

晩御飯を食べて自室に戻ると、オレは机の上のノートPCの電源を入れ、立ち上げる。

食後のコーヒーを机の端に置いて、カオス・クロニクルの世界へ。

IDとパスワードを打ち込み、キャラクター選択画面へと移動する、そこには一人の少年が青空をバックに草原で佇んでいた。

オレは、金髪の少年の隣に立つている青い髪の少年、エルトを選択する。

ローディング画面が表示され、待っている間にコーヒーを一口する。舌の上に広がる香ばしさと、ほんのりとした苦味が脳を刺激し、意識を覚醒させる。

これがなければ始まらない。

やがて、ディスプレイには//ロンの村の景色が映し出され、田の前にはフェイブの少女が立ち尽くしていた。

「エルくん、遅い……」

「よう、パン。つづりと待つてたのか？」

「うんー。」

よほどヒマなんだな、こいつ。勉強とか大丈夫なんだろうか？
いや、案外これでいて頭はかなりよかつたりするかもしない。

「さて、今日は……そうだな。お前、パーティーリーダーになつてメンバーを集めてみる」

「ええ@@@」

「ええ。じゃないよ。一番早いのは、同じレベルの仲間を集める」とだ。それを繰り返している内に、仲が良くなつて友達になる。そうなると、その仲間と固定メンバーで狩りにいくこともあるだろ？

「でも、パン。知らない人とお話するのは苦手。。。」

「じゃあいい機会だ。苦手を克服しろ。お前には明確な目標がない。いつまでもオレにぶらさがつているだけじゃダメだ。独り立ちできるだけの知識とスキルを身に付ける。オレはお前の保護者じゃないんだからな」

ちょっとキツイ言い方になつたかもしないが、これはブンの為である。ブンの職業はナイトだ。ナイトはソロ向きの職業じゃない。今のレベル帯ならばソロまだなんとかできるが、高レベルの狩り場になればなるほどソロは困難になる。

だから早めにパーティーに慣れさせる必要がある。

「いいが、ブン。まずメニューを開いて、そこからパーティー マッチを選ぶんだ。そしたら、パーティー作成ボタンを押して、コメントに『狩り友募集。一緒に炎の祭壇で狩りしましそうへへノ』と入力しろ」

「わ@@ ちょっと待つてへへ」

トロ臭い奴だな。再びローリーを口に含み、ブンの作業が終わるのを待つ。パーティーマッチ（以下マッチ）を作つてもすぐに他のプレイヤーが来るわけでもない。

少し、このカオス・クロニクルの世界観と職業についてお勉強させてやらないとな。

猫耳魔法少女は ？

カオス・クロニクルは、6つの種族と8つの職業の組み合わせでキャラの能力が変わる。

まずは種族。

ヒューマン。平均的な能力値を持つ初心者向けの種族で、どの職業とも相性がいい。

エルフ。攻撃力と魔力が低く打たれ弱いが、回避率や攻撃速度、詠唱速度が高いので、アーチャーや、ヒーラーと相性がいい。

ダークエルフ。攻撃力と魔力はヒューマンを少し上まる程度だが、クリティカル率とクリティカル時の攻撃力が非常に高い。その分ワルフよりもさらに打たれ弱い。ローグ、ウィザードと相性がいい。

オーフ。全種族中最高のHPを誇り、一撃一撃の攻撃力が高い。しかし、速度に関しては全種族中最悪で、特に後衛の魔法系職業とは相性が悪い。とりわけ、ウォーリアが一番相性がいいが、ナイトという選択もある。

ドワーフ。能力はヒューマンを劣化させた感じになる。どの職業もこなせるといえば、こなせるが反面特にどの職業と相性がいいといふわけでもない。しかし、ドワーフは唯一生産系のスキルを使えるという魅力がある。

フェイブ。低いHP。低い防御力。それを補つて有り余る攻撃力、魔力、MP、速度、回避率。基本コンセプトは『殺られる前に殺れ』

、『攻撃は最大の防御』と言つたところか。実装当初はここまで極端なパラメーターではなかつたのだが、ナナメ上行くアップデートのおかげでネタと化した。

次に職業。

ウォーリア。剣、槍、斧・鈍器、デュアルソードを使いこなす近接戦闘のエキスパート。スキルはジャンプして目標に飛び掛る『メガクラッシュ』や、大ダメージを与える『クリティカルブレード』など、多彩で派手なエフェクトのスキルが充実している。

ナイト。剣と盾を装備する。パーティーの壁。ヘイトスキルを用いて自身にターゲットを固定させたり、スキル『ファイナルプロテクション』で防御力を一時的に底上げすることができる。

ローグ。デュアルダガーを装備する。暗殺者。一撃で敵を仕留める事も可能な『デュアルスタッフ』に、5秒間姿を消す『サイレン』トステップ』で敵を不意打ちできる。

アーチャー。弓を装備する。遠距離からちくちくと攻撃でき、視点モードを切り替える事で、ピンポイントで相手の部位を攻撃できる『スナイプ』が使える。

ウェザード。攻撃魔法を使いこなす。魔法書を装備する。地水火風の属性攻撃魔法を使いこなせるが、覚える魔法は種族によって一部異なる。例えると、ヒューマンが覚えるブレイズアローはフェイブは覚えず、代わりにダークアローを覚える。

ヒーラー。回復魔法の使い手。杖を装備。回復魔法全般と、一部だが強化魔法も覚える。このヒーラーの技量によつてパーティーの

生存率が大きく変動する。

サマナー。召喚獣を使役する。装備は杖・魔法書。使役できる召喚獣は、狩り場に出現するMOBである。自分のレベル+5までのMOBと召喚契約を結べるが、最大3匹までしか契約できない。使役できる召喚獣は原則一匹のみである。主人のレベルに合わせ召喚獣もレベルが上がるので、こだわりのあるプレイヤーは、「ゴブリンを最大レベルまで育て、それを最高狩り場で使役する」という。

エンチャント。強化魔法（バフ）を使いこなす。装備は特に何の縛りもなく、全ての武器を装備できる。が、攻撃スキルもないし、攻撃魔法もない。しかし、自分を含めたパーティメンバーの能力を大幅に強化する強化魔法（バフ）を使えるので、ある程度のソロは可能である。ナイト、ヒーラーに続いてパーティ狩りでは必須の職業だ。

「……こんなもんかな。わかつたか、ブン？」

返事がない。

「ブン」

しかし、返事はない。

「ああああああ、ごめん。寝てた……」

「寝落ちひとは、やつてくれるな

「だつて、ヒルくんの説明長いんだもん……」

「お前はアホか。これくらい頭に入れておけ。基本だ。できる前衛つてのは後衛の経験もあるし、できる後衛つてのは前衛の経験があるもんだ。互いが互いを思いやれば、それは自然に理想のパーティーの動きになる。だから、公式に載つてる全種族、全スキルのデータを頭に入れておけ」

「そんなの無理だよ～；；あ、それならエルくんもヒーラー以外の職で前衛やつたことがあるの？？」

一瞬答えるべきか躊躇した。しかし、自分で吐いた言葉を自分で踏み潰したくない。ここでは『やつたことがない』なんて言つたら、できる後衛じやないと自分で言つてしまつよつたモノだ。ブンにナメられるわけにはいかない。

「まあ、な」

「おお～@@～」

それ以上答えるつもりはないので、話題を変えようとした時、いいタイミングでヤマモトがログインしてきた。

オレとブンの真後ろにヤマモトの巨体がうっすらとフードインして、カオス・クロニクルの世界に形作られていく。

「ソロモンよ、私は帰ってきたーー！」

何のセリフだか解らないが、またもシャウトでHコア一帯にヤマモトの声が響く。

「ヤマモトさん」んへへ

「ぬお。 プンちゃん、 今宵も一段とハアハア」

「ハアハア^ q^」

「お前らヤメ口」

プンがヤマモトに連れられ、ハアハア言い出したので止める。それでも、予想よりも早くヤマモトがログインしてくれたので助かっただ。

「いや~とりあえず、仕事放り出して帰ってきた！ 上司が何か言つてけど無視してやつたw」

……ダメな大人がここにいる。

「そんなことしてたらクビ切られるぞ。オレはよく解らないけど、再就職つて難しいんだろ？ てか、それつて大人としてどうなのよ？」

「てへ、中尉にほめられちつた(//)」

何を言つてもダメなようだ。それ以上何も言わないことにして、プンの開いたパーティー・マッチに再び目をやる。

「おい、プン。パーティー希望者が来たみたいだ。えつと、すペリおる……だな。このすペリおるつて奴を招待しない」

マッチには一人のプレイヤーが顔を出していた。名前はすペリある。職業はドワーフエンチャンター。エンチャント一か。都合がい

いな。

ブンが四苦八苦しながらすぺりおるを招待する。事前にオレとヤマモトもパーティーに入っていたので、4人分のHPバーが画面上に表示される。

「よひしへ」

すぺりおるの発言。と、それと同時オレ達の前方にドワーフの少女がとことこ歩いてきた。

「のカオス・クロニクルにおいて、ドワーフ＝ヒゲもじゅじじい」という想像は間違いである。

ドワーフは男女とも、小学校高学年くらいの幼い少年少女である。こちらもオークとは違う意味で人気が高い。特に、ドワーフ女は。田の前に現れたドワーフの少女は、頭に猫耳を装着し、ピンク色のローブ（これまた丈が短い）、杖を装備していて魔法少女然としていた。

「ぬお。す、すぺりおるたん、ハアハア」

案の定、ヤマモトのハアハアがすぺりおるに炸裂する。

「かわいいーーー><w すぺりおるちゃん、かわいい！」

ブンは、ドワーフ女を見るのが初めてなのか、近寄つて抱きつくソーシャルをする。ちなみに抱きつくソーシャルは、相手側の了解を得られないとできない。

「レベル28のドワーフエンチャントーだぜい。縁のおひさん、ム
サイから近寄るな。ねーちゃんエエ尻しどるのう」

「ぬを。まさか、すべつあるたんつて……」

「ああ、俺、ネカマだから」

ドワーフ女の8割は中身が男だとこいつ噂があった。噂は真実らし
い。

二つがあるの田のまつ

すべりおるの中の人は男。まあ、ヘンに女言葉を使われるよりもオープソな方が、さっぱりしていいかもしない。

ドwarf女、通称ドワ娘は一部に熱烈な人気があると先ほど説明したが、ドwarf男、通称ドワ坊も人気がある。これもまた、一部に。

そのドワ娘とドワ坊だけで構成されたギルド『幼稚園』は、ドワ信者の巣窟である。待て、そういえば……幼稚園のギルドマスターの名前はスペリオルだつたはず。

「……スペリオルのセカンドか？」

ちなみにセカンドは、一目目に作成したキャラクターという意味で、サブキャラとも言われる。

すべりおるの装備を見れば、一目でこいつが上級プレイヤーのセカンドキャラだという事が解る。

今のレベル帯で装備できる最高グレードの装備品に、アクセサリーの猫耳。猫耳はけつこう高価なアイテムであるし、そもそも初心者プレイヤーはそんな所に金を使う余裕は無い。

「もしかしてあんた、スペリオルか？」

オレは思い切って聞いてみた。

「あいや？ なーんで俺の事知つてんの？ メインで会つたつけ？」

「いや、名前を見てなんとなく……」

本人だつたらしい。これは助かる。スペリオルはこのサーバーでも屈指のウォーリアである。彼女……いや、彼か。彼のプレイスキルがあれば、オレのアシストもそんなに必要ではないかもしれない。

「んーー？ プンってばかなりキャラメイクいじくつたなあ？ 珍しいぞ、それ」

すべりおるがプンの周りをちょろちょろと動き回る。そして、プンを凝視したまま呟いた。

「うん^ ^ 5時間かけて」の子を産んだのです^ ^ ^

カオス・クロニクルのキャラクターメイキングは自由度が高い。鼻の高さ、位置、唇の大きさ、耳の大きさ、輪郭などなど……いじりだしたらキリがない。

だから、サンプルがいくつか用意されているのだが、キャラに愛着がある奴は最初ここで大いに悩むらしい。それにしても、5時間つて……オレなんか、サンプルAの目つきと髪色いじつただけだぞ。

「ぬを。 そうだったのか、プンちゃんハアハアの秘密はそこに！」

普通、5時間かける奴はいないと思つが……やはりプンは変わっている。

「それじゃ、早速『炎の祭壇』に向うか。おっと、その前にひょ

と飲み物入れてくれるよ」

「こわいへへ」

机の端に置いてあつたマグカップを取り、リビングへと向つ。リビングのドアからは光がもれ出でていて、テレビの賑やかな音が暗い廊下に響き渡つていた。

「あら、またコーヒー？ 成長期なんだから、あんまり飲んだら体に毒よ？」

ドアを開けると、母親がテーブルで家計簿を付けていた。マグカップを右手に持つオレの姿を見て、飲みすぎないよう注意をかけてくる。

「別に……あれ、お父さんは？」

「残業よ。あんたと潤の学費を稼がなくなくちやならないんだから、頑張つてもらつてるの。お母さんも来週からパートに行かないと……あんたも来年受験だから、予備校か家庭教師を付けないといけないわね。ああ、出費がかさむわ。宝くじでも当たらぬかしらねー」

母親の声を背に、戸棚からインスタントコーヒーの瓶を取り出し、マグカップへとそれを入れると、その上にお湯を注ぐ。白い蒸気が立ち上りそれが鼻腔を突きぬけ、コーヒーの香りが脳を刺激する。

「学校はつましくつってるの？」

「別に……」

「お母さん、心配なのよ? 潤はたくさんお友達を連れてくるけど、あんたはいつも家でゲームばっかり。成績は下がったりしてないから、やめろとは言わないけどね。友達をつくる事も大切なのよ? 解ってるの? まり」

母親の話が終わる前にリビングのドアを閉めた。会話の中に出てきた潤とこつのは一年下の弟だ。

小さい頃からそつだつた。父親の仕事の都合で転校を繰り返し、長い付き合いの友達が出来たことは無い。弟は正反対で、すぐに誰とでも仲良くなれる性分らしい。

確かに、現実には……リアルには友達が少ないけど、ネットには……どんなに距離が離れていても、場所が変わらうとも、何でも話せる仲のいい友達がたくさん『いた』。

そうだ。1年前までは……こんな風に打算で物を考えるズルい人間じやなかつた気がする。パンのような初心者とたくさん狩りに出来てすぐに仲良くなつて……。

でも……。

また作れるだろ? 新しい場所で……新しい仲間を。

脱ぎ散らかした制服と、今日の授業で使った教科書。ゴミ箱をひっくり返したような床。そんな地獄絵図のよつたな部屋の中で、そこだけは輝いていた。

机のイスを引いて、腰を落ち着かせると淹れ立てのコーヒーを口に含み、カオス・クロニクルの世界へと戻る。

「ただいま」

「エルくんおかーへへ」

「ぬを。中尉、おかえり」

「おかえりい」

待つてくれた。昨日今日出会ったばかりの3人は、確かにそこについて、オレの事を待つていた。

「行こう、炎の祭壇へ」

エルトは歩き出す。その背中を追うように3人が付いてくる。いつかまた……1年前のようにオレはここに彼らと仲良くなれるのだろうか？

狩り場はみんなのもの

村のテレポーターまで歩いて、そこから一気に炎の祭壇へとテレポートする。

炎の祭壇は30代前半の狩り場だ。けつこう格上のMOBがうろちょろしているが、今田はエンチャンターもいるし、HP管理はオレが一手に引き受けるので、全滅することは無いだろう。

ちなみに、MOBと9レベル以上の差があるので、オレには経験値が入らない。だから、あえてそれを利用してオレもパーティに入っている。こうすれば、オレが経験値をムダに吸ってしまうこともないし、パーティーメンバー全体に効果が及ぶ『グループヒールライト』が使える。逐一メンバーのコンディションが確認できるというのも大きな利点である。

めらめらと燃え盛る炎の沼。辺り一体は炎以外に何もなく、火属性のMOBがうじゅうじゅうと沸いている。中央の祭壇……単なる岩山にはじごをかけた程度の物だが、そこにエリアボス『フレイムガイスト』が待ち構えている。

このメンツでは心許ないので討伐はしない。

カオス・クロニクルは最大で6人までパーティを組める。基本的には、ナイト、ヒーラー、エンchanター+それ以外の職3人という構成がスタンダードだ。討伐するにしても、もう一人くらい欲しい。

それに、種族ボーナスも考えると、エルフとダークエルフがいい

ば文句がないのだが……。

種族ボーナスについて説明すると、各種族ごとにパー・ティーを組んだとき、メンバーに強化魔法が適用されるのだ。種族それぞれに固有のボーナスがあるのだが、6種族それがバラバラに参加していれば6種のボーナスが得られるわけだ。

とはいって、一人でもブンの狩り友候補が来てくれたのでこれ以上の文句は言えないか。

「さて……ブンのためにも少しパー・ティーらしく狩りをしてみるかな。ヤマモトはT」。ブンはF.A. オレは状況に応じてスリープとヒールを。すぺりおるは臨機応変に攻撃

「ぬを。Tしか、了解！」

「あいよー」

「@@?」

ヤマモトとすぺりおるはすぐさま理解してくれたが、ブンだけはまったくわかりませんオーラを放出していた。

「ブン、Tっていうのはターゲットリーダー。それぞれがバラバラにMOBを攻撃したら効率が悪いだろ？だから誰のターゲットに合わせるかを決めておくんだ」

Tは非常に重要な役柄もある。優先して倒すべきMOBを選定するのもそうだが、ナイトのヘイトからもれたMOBや、予期せぬMOBとのリンク時に適切な判断が必要になる。

もう一つの意味として、トークリーダーというのもあつたりするのだが……」これもまた、重要だ。パーティ内のチャットを盛り上げ狩りを退屈にしない。これは誰にでもできることではないが。

「FAは、ファーストアタック。要するにMOBを最初に攻撃するプレイヤーだな。これは性質上ナイトの役割だ。MOBへの攻撃を優先して繰り出し、ヘイトスキルを使って敵対心をあおる。そうすればMOBの攻撃はお前に集中する……大丈夫。お前のHPは常にオレが見ていて、危ないと思つたら即リターンする。損な役割かもしれないけど、これができればお前は立派なナイトだよ」

「うーん、わかんないよお……」

「そうだな……簡単に言えば、ヤマモトのターゲットしているMOBにヘイトをかける。それを倒したらまたヤマモトのターゲットしたMOBにヘイト。その繰り返しになるな」

「わかった！ ヤマモトに会わせればいいんだね！ それならおバカなパンでもできちゃう♪♪♪♪♪」

「やうか。それじゃ早速始めよう」

「……」

「なんだ、パン？」

「パンはおバカじゃないよ♪♪ つていうフォロー待ってるの、元のもの…どうして誰もそう言つてくれないの…」

しばりべ監沈黙して。

「ブンはおバカじゃないよへへ これで、いいのか？」

素つ氣無くそつタイピングしてみた。

「心がこもってないよ@@"」

「お前はアホか。初心者なんて皆最初は解らない事だらけさ。やつてる内になれりゃいいんだ。オレだつて最初はそうだつたんだし、気にするな」

「やうそー ぼくちんなんか、最初ダークエルフのおねーちゃんの尻ばかり見てたら、今度はエルフのおにやのこの生足に目が行つて、ドワ娘のツインテールでうつとりしてたら、いつの間にかパーティー追い出されてたよ！ ブンちゃんはハアハア指數が半端ないから、いっぱい失敗しても大丈夫！ 初心者さんにはよくあることだよん！」

「ヤマモト」

「ぬを。中尉、何か？」

「お前がミスつたら即追放する」

「ひどすー」

ひどくないだろ？。ここまで口口バカいとは、想像できなかつたが。……男キャラでよかつた。そんな風に見られてたりと思つてゾつとする。

「じゃあ、パンも注意しなや。エルくんの横顔立つひとつこの暇はないわ。」

男キャラでも、見られる」とは見られるらしい……。

「……そろそろ始めねえ？ 僕もう、ブンのスカートの中のぞくの

食事指南

のぞくなよ。

とりあえず狩り場での諸注意を話し終えた後、オレ達はさっそく狩りをすることになった。狩りに入る前にすべりおるが習得しているバフをかけて、戦闘力を上げスタート。

ヤマモトがファイアスピリットとコラボにてゲットし、ブンがそれをヘイトする。ブンめがけて襲い掛かるMOBをヤマモトが攻撃し、すぺりあるがその補助をする。

「ぬを。やっぱバフがあるとぜんぜん違うわ！　トランザム発動したみたいだね！　キラ・ヤマモト、田嶋を駆逐する！」

「アサヒサン」

「ヤマモトアキラ、ヒールなしだな」

「>>>二十九、こちがうす」

「ぬお。これなんてイジメ（。。）」

順調にMOBを倒していく。初めはミスを重ねていたプンだったが、次第に慣れていき、今では攻撃しながらチャットできるくらい余裕が生まれていた。いい感じだ。

プンは成長している。チャットの速さもだが、順調にレベルも上がっているし、自分の立ち位置をちゃんと理解できるようになった。昨日今日でここまで成長しているのを見ると、付き合つた甲斐もあるとこりものだ。

……やればできる子なんだな。

とはいって、プンはフェイブナイトだ。気を抜けば一瞬で瀕死状態になってしまふので非常にヒヤヒヤさせられる。常にHPゲージが4分の3以上ある状態をキープしておかなくてはならない。

狩り始めて、20分ほどした時……それは唐突に起つた。

プンがヤマモトのターゲットしたMOBにヘイトをかける。MOBがこちらにやってきて、いきなり倒れた。まだ、攻撃していないはずなのに。

「さつや？」

「ぬを。プンちゃん攻撃した？？」

「ハハん、してないよー？」

倒れたMOBをよく見ると、矢が3本刺さっている。カメラを回して周囲を見渡すと、炎の向こう側に3つの人影があつた。

「横殴り……か？」

オレが呟いてすぐ、3つの人影がこちらにやってくる。それは、3人のエルフの女性だった。3人とも同じ装備、同じ髪型、同じ顔である。ただし、髪色だけは違っている。

「げえ。肉屋だ。うつぜ。うーー、あいつのナワバリだつたんかあ」

「すぺりおむちやん、お肉屋さんなんてビリヒモないよ@.@.^.」

「パン。あいつらの名前見てみろ」

「えつと。豚肉500㌘ 牛肉500㌘ 鶏肉500㌘……？」

『肉屋』はエルフアーチャー3人の事を指している。豚肉500㌘ 牛肉500㌘ 鶏肉500㌘という3キャラではあるが、あれを操作しているのはたった一人の人間なのだ。

3PC……3つのPCでマクロを駆使して同時に3キャラクターを操作する風変わりなプレイヤーで、キャラの名前から『肉屋』と呼ばれるようになつた。

しかも、この肉屋。狩りのマナーがすこぶる悪い。一旦狩り場に引きこもると、5時間はずっと独占していて他のプレイヤーが近づくことのない、周囲のMOBを全て乱獲してまで独占しようと/orする。一般プレイヤーからは嫌われている存在だ。その肉屋がここにいる……ということは、この狩り場もあいつに独占されてしまうだろう。

「いい、使つてます」

真ん中の金髪のエルフ……おやりく、これがメインとしているキヤラなのだろう、豚肉500gがそういう言いやこなや、オレに向つて矢を放つた。

矢がものすごい勢いでオレに迫り　命中する。

しかし、矢がオレをすり抜けて、真後ろに出現したMOBに命中した。

「邪魔」

「ぬを。いくら金髪エルフぺったんこ生足ステキつ子でも許せん。お前にはハアハアせんぞ！」

「ヤマモト、後ろにすつこんでバナナでも食つてろ。豚肉500gさん。ここはオレ達が20分以上前から狩りをしていたんです。狩場はみんなの物でしょう？　みんなで譲りあって　」

オレのセリフが終わるまでに、周囲はMOBの死体でいっぱいになっていた。なおも3人のエルフは弓を引き、矢を放つ。

「だから？」

「こいつは人の話を聞くつもりなどないらしい。

……どうするか。

リアルのオレヒルト

「場所を変えよう。もう少し奥にいけば、弓矢に耐性のあるMOBがいたはずだ。いくら肉屋でもそれは狙わないだろう。せっかくここに来たんだ、あいつに何を言われようとオレ達はここで狩る。嫌な思いをした奴もいるかもしれないけど、我慢してくれ……PVPなんてこと、したくはないし」

「いや～しようがないんじゃねえ？ 肉屋は何を言つてもムダだから絶対こじりどかねーよ。それより、むしろ弓矢耐性のMOBを二つの田の前で狩りまくってやるーぜ。その方が楽しいわ！」

すべりおぬせをつゝて、一足先に炎の奥へと消えて行った。

「ぼくちんは、中尉の言つ事に従いますよ。確かにあの人はちょっとムカつくけど、生足がステキだからこれ以上はなーんも言えません。は！？ あの危なつかしい走り方のすべりおるたん……ハアハア。ぬを。けれどすべりおるたん、中身男……うづ。ぼくちんはどうすれば……」

ヤマモトは結局ハアハア言いながらすべりおるの後を追つていった。何でもいいのかあいつは。

「ブン。奥に行こう。こよつけようと強いけど、邪魔されるよりマシだ」

「何で」

「ん？」

「何でみんな仲良く一緒に狩れないのかな～～～ みんなで狩ったほうが絶対楽しいのに。。」

「そうだな。でも、それぞれ事情があるんだよ。一人で狩りたい奴だっているし、時間がないから他人に付き合つてる暇もないのかもしない」

オレも他人の事は言えないが……。

ブンはまだ納得していない様子だが、オレが歩き出すとブンも離れまいとすぐさま後を追つてきた。

場所を変えて、再度すぺりおるのバフを受けて狩りを始める。M O B の攻撃が少し激しくなつたが、狩れないほどのことじゃない。

遠くから矢を放つ音がひっきりなしに聞こえてくるので、肉屋の乱獲は健在のようだ。だが、田論見通りこのあたりは『矢が通じないM O B いるので、近くには寄つてこない。

正直、『邪魔』と言われたときにはカチンと来だが、熱くならなくてよかつたと思う。今のオレは一人じゃない。不本意ながら……ブンのお世話係りもある。

そのブンと狩り友となってくれるかもしれない、すぺりおるの前で問題を起こすのは得策じやない。すぺりおる本人も憤慨していたが、彼はあれでいてギルドのマスターだ。

後々に問題になるような事を起こしてはならない。ギルドマスターはギルドの顔だから、その下にいるギルメンにまで迷惑をかけて

しまつ」とになる。

ギルドマスターはギルメンの事を第一に考えなければいけないんだ。ギルメンは仲間であつて家族同然なんだから……。

だから、これはブンを思つての行動ではない。すべりあるとブンの関係を円滑に深めてもらつための措置だ。

それは回りまわつてオレのためである。こいつがレベル40になればそれまでだ。

「ぬを。ブンちやんレベルアップおめえええ！ いくつになつたの？」

「ありがとー！ 28になつちやつた！ えへ▽▽^▽」

あと12レベル……意外とその日は近いのかかもしれない。そうなれば、目的のアイテムを得て、ブンとお別れだ。そのまま順調に育てば、あるいは桜並みに化けるかもしれないな。

「ぎゃーーーーーーー 間違えてエリアボスさんにヘイトしちやつたあ@@@… エルくん助けてええええ」

「お前はアホか。なんでよりによつてエリアボスにヘイトした！ 少し見直したオレの感傷に浸つた時間を返せ！」

前言撤回だ。こいつが桜並みに化けるなんてありえない。あいつは冷静で努力家なんだ。こんなに天然ボケてない。

「全員オレの周りに集まれ！ リターンを発動させる」

「ぬを。フレイムガイストたんがハアハア言つてるおー！ ギヤーす
！ 一撃でぼくちん、死んだ（（。。。。））ぱねえつすー！」

ヤマモトの尊い犠牲のお陰でオレ達は無事にリターンドリロンに帰還することができた。

「……」トトロは、うなづいた。

村の広場でヤマモトが大の字になつて倒れている。死体ごと村中に転送されたようだ。それを見つけたブンがすぐさまヤマモトに駆けつけた。

「ねえ。パンちゃん、もつと一いちへカモンです。そーそー。あ、もうちょっと右。あ、いきすぐ……半歩左へ」

「うるさい？」

「ばっちぐー！ このアングル。マジで神です！ さっそくスクリーンショットにとつて寝る前にハアハアを」

すぐにはリザーレクションをかけてヤマモトを蘇生させた。

「ぬを。まだ保存してないの?」
中尉、男のロマンを向とするのですか?」

「黙れド変態」

「そんな事言つて、中尉だつてほんとは興味あるんでしょお？
男子にとつて、女子のスカートの下はまさに聖域！ シャングリラ

！　ゴートピア！　ア・バオア・クー！

「オレ、女に興味は無いから」

「な、なんですか…？　まさか、中尉は……？」

「ああ。オレ、リアル17歳の女子高生なんだ」

「ええええええええええええええええええええ！」

「つて言つたら面白いでろうや。」

「な～んだ。びっくりした[冗談だつたのかあ。一瞬ほんとにそつか
と思つたで]わすよ。このキャラ・ヤマモト修行が足りませんでした
……」

「オレだつて冗談くらこは言つた。それより……ブン！　ヒリアボ
スに間違つてヘイトとかお前は面白い奴だよ。一緒にいてスリリン
グで飽きないわ」

「えへへへへ～でしょでしょ～～～」

「ほめてねーよー。」

「あ。エルトヨーい。俺、このへんで抜けるわ。明日早いし。そろ
そろ寝ないと、嫁に殺される」

すべりおるがオレ達の会話に割つて入つてくる。……嫁？

「ぬを。すべりおるがオレ達の会話に割つて入つてくる。どうせあれでし

よ？ ディスプレイの中の嫁でそ？ うなみにぼくひさん、姉と妹と娘のお母さんも極秘フォルダにいますね

「いや。俺ウソつかねーし」

「ヤマモト。前、マジきもいな

「ヤマモト、見損なこましたへへ

「な、なんですかこの空氣は。ぼくちんは中尉と違つて健全な男の子なの。。」

「ヒルくんはかっこよくて優しくからいいけど、ヤマモトはダメなのへへ

「ださうだ、ヤマモト。今日までの邊で終わりこな。お前もときさとログアウトして、極秘フォルダ開いてハアハアしとけ

「くそーー。中尉が泣いて謝つて土下座してフォルダの中身を見せてくれさせこと頼んできたら、見せてやるからなーへへ わりどじゅら見せる気があるんじゃないか。別に見たくないけどボケーー！」

ヤマモトは捨てセリフを残して去つていった。ていうか、始めから見せる気があるんじゃないけど。

「ほんじゃー落ちるわな。つと。チビがぐずり出した。ああ、それとー。今日、楽しかったぜ！ なんか、始めたころを思い出したよ。狩りつてこんな風に乐しかったんだな。今じゃレベル上げも単なる作業だ。お前らと一緒にあつたよ。また今度機会があればどっかいーぜー。じゅあな

すぺりおるはソーシャルでかわいらしく一回転すると、フードアウトして消えて行つた。あとに残されたのはオレとブンだけだ。

「エルくん、ありがと^ ^」

「何が?」

「ブン、また一人お友達ができたし、知らない狩り場に連れて行ってもらえた。それに、パーティーでの狩り方もお勉強になつたよー。」

「そうか。それはよかつた」

「ブンは妄想しちゃうのです、リアルのエルくんも、きつとクールそこに見えて熱くて優しい男の子なんじゃないかつて^ ^」

「勝手に妄想するな」

「背は190CM以上あつて、アイドルみたいにかっこいい顔で、声はちよつと低めで、特技はブラジリアン柔術@@ー。」

「なんだそれは」

なんでオレの特技がブラジリアン柔術なのかも突つ込みたい。

「いつかね。リアルでエルくんに会えるといいな^ ^」

「オフ会がしたいのか?」

「うん@@ やまちゃんも、すぺりおるちゃんも呼んでみんなで

お話するのー。」

「オレはバス。そういうのに興味ないから」

リアルを持ち出すな。ゲームはゲームだ。ここでのオレはエルトであって、リアルのオレは関係ない。

「うーん、そつか……じゃあしようがないね。それじゃブンも落ちるね！宿題まだなんだつた@○@ 数学は苦手ナンデス……」

「数学はオレも苦手だな。英語とか古文なら教えてあげれるかもだけど」

「エルくんも文系かー。でもブンは英語まったく苦手ですー。昔の日本の偉い人に、ブンが生まれまで鎖国しどけ@○@ー。と言つてやりたいくらーなの……」

「無茶を言つな」

「あは。それじゃ、ブンも落ちるねーお休み、エルくんண�

「ああ、お休み」

田の前でブンがログアウトしたのを確認し、オレもまたログアウトして田の電源を切った。

ボーナスチャンス到来！？

「オフ会……ね」

自室の学習机のイスに体重を預け、電源が切れたPCを見つめる。真っ暗な液晶画面には何も映し出されていない。それは、リアルのオレの瞳も同じ。

1年前のあれ以来、他人に対してもたく興味がなくなってしまつた。けれど、無愛想な顔をして他人を避けていたら、周囲に敵を作りかねない。

だから、作り笑いをして、浅く付き合つて本心は決して見せないようにしている。深い所まで踏み込まれたくない。母親が言ったような、友達を家に連れてくるなんて事は未来永劫ないだろう。

それに、こんな部屋見たらみんなドン引きするだろうし。

ふと、パンの言葉を思い出す。

『リアルでエルくんに会えるといいなへへ』

ゲームの中のオレとリアルのオレでは違います。パンはきっと幻滅するだろうな。だから、会わないほうがいい。

力オス・クロニクルの世界では、容姿をいくらでも美しく設定することが可能だ。だから、そこにリアルの自分の容姿の美醜は関係ない。

ありのままのそいつの姿が……心が浮き彫りになる。文字とわずかなソーシャルとアクションだけで、そいつの本性を知ることが出来るんだ。

一体オレの何がいいと言つんだらうか？ オレは偽善者なんだぞ、ブン。

空になつたマグカップを片手に、部屋のドアを開けると就寝前のコーヒーを飲むためリビングへと降りていった。

* * * * *

今日も眠い。俺は必死になつてあぐびをかみ殺しながら、駅の改札をすり抜け学校へと向つていた。

俺の周りには、詰襟の学生服に身を包んだ少年や、黒い生地に白い刺繡のセーラー服に身を包んだ同じ年くらいの少女達。

俺の通つている高校の生徒達だ。女子の制服はシンプルだが、胸の白いリボンが大きなチャームポイントで、近所の大きなお友達の間でも人気のある一品だ。シンプルなところがいいらしい。

いや、これは稻田から仕入れた情報だが。

駅から高校までは歩いて20分ほどもかかる。その行程も半分以上を終え、学校を視界の端に捉えた時、石鹼のいい香りがした。

俺には解る。彼女だ。

「相羽さん！ おはよ！」

振り返つて昨日の夜一生懸命練習した、対相羽 真理奈専用挨拶を爽やかなポーズで決めて、白い歯をキラリと輝かせた。 はず。

「あ、ちょっと待つてよー！」

無視されてしまった。

さては、照れているのか相羽 真理奈！？ ふはは。 そうだろううそうだろ？。 3時間かけて編み出した俺の最終奥義である。これが直撃して無事な女子はいないはず！

「あの……相羽さん？？」

歩く速度が早い。 もしや、予想以上の破壊力だったか？

俺も速度を上げて彼女の横に並んで歩く。 と、よつよつこへちらを振り返つてくれた。

「誰……？」

「へ？」

「私、急いでますので」

「ええ？ ちょっと待つて、俺だよ、同じクラスで隣の席の、渡辺だよ！」

「……ああ！ 渡辺くん。ごめんね、私。寝ぼけてたみたい

普通に俺の事を忘れていたみたいだ。軽くショックである。けれど、その爽やかな笑顔で俺の心は一瞬で満たされる。

真新しいセーラー服に身を包んだ彼女の姿は、さながら女神のようだ。太陽の光を受け、神々しさすら感じる。

油断してしまったせいか、大きなあぐびが一つ俺の口から出でてしまった。やばい。今の俺はすごく不細工な顔だつただろう。

「……寝不足なの？」

「あ！ う、うん。ちょっと夜遅くまでゲームやってて！ カオス・クロニクルっていうネトゲなんだけど……」

「カオス・クロニクル？」

一瞬で相羽さんの目が大きく見開かれる。相当驚いた様子だ。驚いた顔もカワイイ。この表情はレアかもしれないな。

「あれ？ もしかして、相羽さん知ってるの？ 昔は人気あつたみたいだけど、今はもうマイナーもいいとこなんだよね」

「あ、ううん。前の学校でプレイしている人がいたから……渡辺くん。カオス・クロニクルやってるんだ……長いの？」

「んー。まだ1年くらいかな？ 初めてプレイした時、ぜんぜん操作が解らなかつたんだけど、カインっていう親切な人が色々教えてくれたんだ。まるで兄貴みたいな人だったよ。でつかいギルドのマ

スターもやつててさ、何だつけ？えっと灰色の狼？すつじく強くて、かつこよくて……憧れたなあ」

「カインが……教えた……そう。そう……なんだ」

「相羽さんもやつてみない？俺がめいっぱいサポートするからさ。きつと楽しいよ？」

「これはチャンスだ。相羽さんと接点が出来た。カオス・クロニクルと一緒にプレイして、相羽さんとの思い出を積み重ねていく……学校以外で彼女と過ごす時間を作れる。

「うん。めんなさい。私、パソコン苦手なの。だから……」

「あ。ああ、そつか。残念だなあ。でも、もし気が変わったら教えてよ。いつでも育成手伝つからさー。」

「うん。ありがとうね、渡辺くん」

残念だ。相羽さんをエルフのヒーラーにして、ヒールしてもらったり、ドワ娘のエンチャントナーにして、バフをかけてもらったり、ダークエルフのナイトにして、守つてもらいたいといつ、一瞬の妄想が盛大に弾けとんだ。

「私、先に行くね」

相羽さんはさつと駆けて行く。学校の昇降口に入つて、下駄箱から上靴を履き替える姿に見とれてしまつ。相羽さんのスカート丈はけつこう短い。他の女子に比べるとまだ長いほうだが……。

『履き替えるその瞬間にかがみこむ姿勢になつて、黒いプリーツスカートから、かぶりつきたくなるような、艶のある白い太ももが露になつた。

俺はたまらず息を飲んだ。これは、まさか。

ボーナスチャンス！？

あ！ あとひょりと！ もう少し、そりだ。そのまま……。

「ナ～ベ～！ よ、おはようさん！」

俺の願いは叶う」となく、代わりに稻田のダリ声と、メガネのフレームが視界に入り込んできた。

「あん！？」

「な、なんだよ何でそんな怖い顔で睨んでんの？ 俺、お前に何かした？？」

「お前は全世界の夢見る青少年の敵だ」

稻田の顔を無理矢理どけると、そこにはすでに相羽さんの姿はなかつた。

駅前で発生したイベント

今日も相羽さんの周りにはいつも誰かがいて、賑やかな渦を作っていた。

俺が付け入る隙なんてまつたくない。授業中ちらちらと隣を盗み見る程度で、話しかけるタイミングが中々みつからない。

カオス・クロニクルと一緒にプレイできれば、学校で話しかけられないでも別に気にする必要はないけど……。しつこく誘つたら嫌われちゃう。

……何か接点が欲しいな。

そんなことをずっと思案していたら、いつの間にか火曜日の授業が全て終わっていた。

「相羽さん。一緒に帰る？」

女子グループのリーダーが、カバンに教科書をしまい終った相羽さんに話しかけた。

「…………」めぐなさい。今日は、家の用事で早く帰らないといけないの

「やつなんだ。じゃ、また明日ねー。」

「「」めぐなさい」

相羽さんはそう言つと、カバンをつかんで足早に教室を去つて行つた。転校してまだ間もないから、まだまだ忙しいんだろうな。

話しかけた女子も同じように思つたらしく、相羽さんを引きとめる事はしなかつた。

……俺も帰るかな。確かに今日は漫画の発売日だ。駅前の本屋に寄つて帰るか。

学校を出ると、朝通つた通学路を遡つて駅へと向う。

駅前は本屋やスーパー、銀行や飲食店が立ち並び、夕方にもなれば人でごつた返している。目的の品を手に入れるべく、大型チュー
ン店の本屋へと足を踏み入れた。

無事に用当ての物を購入して、駅へと向おうとした時だ。本屋のすぐ入り口で大きな袋を抱えた女の子がうづくまっていた。白い長袖のTシャツにジーンズ姿の、中学1・2年生くらいのかわいらしこい子だ。

袋の中身は大量のインスタントコーヒーで、駅前のスーパーの袋にそれがはちきれんばかりに押し込まれている。

あれだけの量を女の子が運ぶのは、きついだろうな。けれど、ち
ょうど電車が来るいい時間だ。これを逃がすとちょっと待たなけれ
ばならない。

俺は心中で彼女に手を合わせて、目を合わせないようこ過ぎ去
ろうとした。

一生懸命に袋を両手で抱えようと立ち上がる彼女。ふと、その横顔が視界に入つて俺は足を止めた。

その横顔に見覚えがある。つい最近、どこかで会つたような気がする。そんな考えを巡らせていると、田の前でインスタント「コーヒー」の瓶が大量にばら撒かれた。

「あ！」「ごめんなさい！　おケガはありませんか？」

「ああ。大丈夫。ほら、これ。あ、こっちにも」

「あ、ありがとうございます。お優しいんですね」

「コーヒーの瓶をつかんだ白く細い腕をたどつていくと、気の弱そうな瞳と田が合つた。黒い髪は男の子のように短く切りそろえられており、その下の顔はドワ娘のような愛らしさがあつて、きゅっときつく結ばれた唇が緊張をあらわしていた。

瞳は潤んでいて、今にも泣き出しそうな感じである。

「すごい量のコーヒーだね。これ、全部君の？」

「いえ、お姉ちゃんのです。ぼく、コーヒーは苦くて飲めないから……」「めんなさい」

何故か謝られた。

「いや、それよりこんな大量のコーヒーを妹一人に買いに行かせるなんて、鬼みたいな姉貴だな！　俺だったらそんな姉貴にソバット入れるね！」

「や、やめにゃだい！　お姉ちゃんは向も悪くないんです。ぼくがこつも、デジで泣き虫だから……『めんなさい』

また謝られた。

なんだか見ていてかわいそうになつた。じょうがない。乗りかかった船だ。どうせ帰つてやることこつたら、ゲームくらいだし、たまにはボランティアも悪くないだろ。

「君、お家どこへ よかつたら」

「やめてくださいー 誰か、助けてー！」

「は？」

「お姉ちやんに言われてるんです。知らないおじさんに声をかけられたら、股間を蹴り潰して顔面にツバ吐いて逃げられて……ぼく、ツバを吐くのはちょっと……」

どんな姉貴だ！　てか、股間を蹴るのに容赦は無いのかこの子は。

「別に怪しいもんじゃないよ（このセリフ、怪しい奴のセリフか）。この近くの高校の生徒なんだ。ほひ、学生証。な？　田の前で困っている女の子がいたら助けるのは当然……」

俺、さつざにサムいな。

「『』めんなさいー。」

「いや、だから謝りなくていいって。体力には自信があるし」

「あの、やうじやなくて……ぼく、男……です」

電撃が俺の体中を駆け巡った。この子は一体何を言つてこられるのだらうか、一瞬思考が停止する。

「え？ オトーネ、ああ、音子とかこう音前？」

「ぼくの名前、潤です！ 音子じゃありません！」

ちょうどいい

潤は、小さな肩を震わせ頬を赤く染めて叫んだ。それに驚いた周囲の人々が何事かと振り向き、俺は冷たい視線の集中砲火を受ける。

潤の瞳はすでに決壊寸前のダムのようになっていて、今にも泣き出しそうだ。

「あ、えーと。潤。その、気に障つたなら謝るよ。『ごめん。その、純粋に助けたいだけなんだ。その、重そうだったから』

「『ごめんなさい。取り乱してしまいました。お姉ちゃんにもよく言われるんです。『あなたは男らしくない』って……毎日……だから、ごめんなさい』

「いや、そんなに謝らなくても……とにかくさ。半分持つてあげるよ。俺、目の前で誰かが困つていたらほつとけないんだ。だから、手伝わしてくれよ」

潤は、まるで信じられない物を見るような目で、俺の顔をじっと見つめる。背は俺よりも10cmは低い。上田づかいで見つめられている形なつているわけだが……。

やはりこの子の顔……どこかで見覚えがある? けれど、潤に出会ったのは今日が初めてだ。最近出会った誰かに似ている……だめだな、答えが出てこない。

頭の引き出しを一生懸命ほじくり返していると、潤が少しばにかんだ様子でぼそぼそとしゃべりだした。

「あの……じゃあ、お願ひします。本当ほほほく、少し困っていたんです。『めんなさ』」

『「めんななせ」とこののが口癖になってしまったのか、潤の口から何度も『『めんなさい』』が連呼されている。

「じゃあ、俺いつ持ちつよ。で、家はどひかへ」

「あの、三十一日です。ここからだと一〇分くらい歩いた所になりますね。付いてきてください」

潤はそう言つと、俺に背中を向けて高校の方に向って歩き出した。すると、みるみる小さな背中が遠ざかっていく。

「つづ歩くのは早いな。ちょっと待つてくれ、潤」

速度を上げて潤に追いつくと、横に並んで一緒に歩き出す。

「それにしても……ほんとすこし量のコーヒーだな。これを一人で飲むのが、君のおねーさまは」

「お姉ちゃん、コーヒー大好きなんです。お砂糖も、ミルクも入れずに飲んじやうんですよ。すごいです。それにしても、この街に親切な人がいて本当に良かつた。越してきてまだそんなに時間が経つてないから、知り合いも少ないんです」

「せうなんだ？　じゃあ、このくんはまだあんまり詳しくないのか？」

「はい。だから、本当は声をかけてくださった時、すつゝ嬉しか

つたんです。でも、誰にも迷惑をかけたくないで……」

「気にするなよ。俺でよければいくらでも声をかけてくれ。困つて
いることがあるなら、力になるぜ?」

「ありがとうございます! よかつた……いい人に知り合えて。あ、
そういうえば……まだお名前聞いてませんでした。ごめんなさい」

「そういえば、まだ名乗つてなかつたな。

「ああ。渡辺 翔つていうんだ」

「渡辺さんですね。本当にありがとうございます。けど……どうし
てそんなに親切にしてくれるんですか?」

「ん? んー。ゲームでさ。ものすごく親切にしてくれた人がいた
んだよ。それまでの俺つて、別段他人に興味が無くてさ。目の前で
誰が転げようが、ケガをしようが見て見ぬフリをする人間味のない
奴だつたんだ。そんな俺に、1から10までそのゲームの事を手取
り足取り教えてくれて……勉強も教えてくれたつけ。とにかく、誰
にでも優しくって、強い人がいてさ。憧れたんだ。俺もあんな風に
なりたいって」

「そりなんですか」

「けれど、ある日……その人は俺の目の前から突然姿を消した。後
で聞いた話じや、初心者の相手をしていく時に何かあつたらしくて
……しかも、それが原因で自分の作ったギルドからも追い出されて、
仲間からも色々言われたらしくてね……。俺は、そのことを知らな
かったとはいえ、力になれなかつたんだ。あれだけ世話になつたの

に……だからや。田の前で困っている人は助けてあげようって思うようになった。ゲームの中でも、リアルでもね」

カインは、多くの事を俺に教えてくれた。だから……俺もカインのように優しくなりたいと思った。だから、相羽さんがカオス・クロニクルをプレイするのであれば、カインがしてくれたように接してあげたい。

「すごい人ですね。渡辺さんって」

潤が瞳をつぶると輝かせながら、感動していた。

「いや、すごいっていうのならあの人だよ。いつかリアルで会えたらなつて、ずっと思つてたけど……MMOだからな。きっと色々あるんだ」

「そうなんですか……それ、なんていうゲームなんですか? ぼくもやってみたくなりました。渡辺さんのやつているゲーム!」

「カオス・クロニクルだよ。基本料金は無料だから、PCとネットの環境さえあれば、大丈夫」

動作するために必要なスペックもあるが、細かく話すと長くなってしまうので、この場は置いておこう。

「それ、知つてます! うちのお姉ちゃんも昔やつてました。今はどうかわからないけど……」

「そつかー。じゃあ、潤のねーちゃんどこかであつてるかもしないな、俺。世間つて狭いね」

「あ、でも。ぼくPICO音痴なんです。お姉ちゃんはすりしゃべ詳しいんですけど、カオス・クロニクルの話に触ると怖くて……」

「持つているのはノート?」

「はい」

「それなら、今度俺がセットアップしてあげるよ。家にはクライアントデータの入ったCD-ROMがあるし」

ちなみに、カオス・クロニクルのゲーム本体は公式ホームページから無料でダウンロードできる。

「本当にですか!? ジャア、明日行つてもいいですか?」

「明日か……いこよ。水曜は5時間目で終わるし、駅前で待ち合わせじょうか?」

「はい。じゃあ、ぼくの携帯のメールアド教えておきますね」

潤はやつ言つと、ローリーの袋を地面に置いてポケットから携帯を取り出した。

俺も胸ポケットから携帯を取り出し、赤外線通信で番号を交換する。

「これでよし。じゃあ、明日はまじ持つて駅前に……そうだな。3時でいいかな。着いたらメールいれるからね」

「はい。本当にありがとうございます、渡辺さん。あ、ぼくの家すぐそこなんで、ここまででいいです！」

俺は持っていた袋を潤の左手に握らせた。

「潤はたいへんだな。俺は長男で下に妹がいるから、姉貴がいる奴の気持ちはわからないけど、苦労しそうだ」

「そんなことないですよ。確かにお姉ちゃん、普段は怖いけど優しい時もあるし、両親がいない時は」飯も作ってくれるんです。それに……たった一人のお姉ちゃんですから。だから、大事にしないと

「今の言葉……家の妹のアホにも聞かせてやりたい！　あいつ、俺に蹴りいれるわ。家族共用のＰＣに入れといた工口画像を全部削除するわ。トイレに忘れた工口本を、俺の部屋でキャンプファイヤーするわ……妹の風上にもおけん奴なんだ！」

「えっと……それはたいへんですね」

俺の2つ年下の妹……名を愛紗あいさといつ。とにかくにも生意氣で、兄妹仲は基本的に悪い。潤の性格を少しは見習つてもらいたいものである。ていうか、潤みたいな弟が欲しかった。今から両親に頼んでも、もう頑張れないから無理だらうけど。

「それじゃあな、潤。色々がんばれよ」

「はい、色々がんばります。さよなら、渡辺さん！」

潤の後姿が住宅街の角で消えて、俺も歩き出す。しばらく駅までの道を歩いていたが、ふと思い出して携帯の電話帳をチェックして

みた。

潤の番号などを一応確認しておこう。電話帳を開いてすぐに潤の名前が見つかった。フルネームで登録しているらしく、あ行のトップにその名前があつたからだ。

「相羽 潤……。相羽？ 相羽さんと同じ名字か……偶然か？」

ザ・ヤマモトセカンド

いや、また……そういえば、潤は姉がいると言っていた。相羽といふ名字は珍しいと思う。それに、今になつて考えれば潤の横顔が誰に似ているかだなんて、すごく簡単な事だ。

相羽 真理奈。彼女は潤の姉なのだ。そして、またまた潤の話通りであれば、カオス・クロニクルをプレイしていたという……けれど、朝会ったときはプレイしていないと言つた。

『カオス・クロニクルの話に触れる怖くて』という潤の言葉。もしかしたら、何かあつたのかもしれない。けど、何が? 解らない……。

そういえば、朝、カインの話題になつた時……視線が鋭くなつた。あれは気のせいなんかじゃない。まるで別人のようない……。

相羽さんは……カインのリアルの知り合いなのか? もしくは、俺と同じようにカインに世話になつた初心者の一人かもしれない。

聞きたい。そう思った。もし、カインの事を知つてゐるなら……カインに会つてみたい。今どこでどうしているのか、今のカオス・クロニクルの状況を伝えたい。

カインが戻つてくれば、きっと前のような活気に満ちて……俺も、灰色の狼に戻れるかもしだれない。そしてもう一度、カインと一緒に冒険がしたい。あの頃みたいに……。

とはいへ、この話題は彼女の前ではタブーらしい。普通に聞き出

すのは無理だな……どうするか。

俺は駅の改札を通過と、ホームで電車を待ち続けながら色々なことに思いを馳せていた。

* * * * *

桜。フェイブナイトで現サーバー最強のナイト。彼に出会ったのは1年近く前……。

今のパンのように装備がめちゃくちゃで、T-とは違うMOBを攻撃したり、ダンジョンで迷子になって狩り開始の時間が30分も遅れたことがあった。

でも、真面目な奴で教えた事はすぐに覚えるし、ときおり言う[冗談もなかなか笑えるし、優しい奴だった。

聞けば、オレと同じ年で高校生らしく、何度も勉強を教えたことがある。ちなみにあいつの桜という名前は、好物のもみじまんじゅうからとつてきたりしい。

漢字一文字でとってもカッコイイ名前だと思つてたのに、ちょっとがっかりした記憶もある。

いつからかな。桜が隣にいるのが当たり前になつたのは。ログインするとあいつがいて、ギルドメンバー数人を引き連れギルドハント……ギルメンのみで構成されたパーティーで狩りをしたものだ。

桺と話したい。あいつはいつもオレの味方だつたから……新しい生活に、新しい家に、新しい繋がり……正直、かなり戸惑つてゐる。桺と話して……でも、今のはオレは『エルト』なのだ。桺の知つてゐるオレではない。だから、無理なんだ。けれど……。

「エルくん。こんばんわんわん（^ ^）ノ」

いつの間にかアソカロケインして、ボレの皿の前に立っていた。

一 ああ、ナンか。相変わらずだな」

「ブンは相変わらず元気だよ～～へへ▽
残らないもん！」
ブンから元気取つたら何も

パンはぐるぐるとオレの周りを、鎖から解き放たれた犬のように走り回る。ちなみにここは、ミロンの村を一步出た所だ。

「そうだな」

面倒なので、適当に相槌を打つておく。

「エルくんひどい；；」

「そうだな」

「@@? 何か考え方??」

走り回るのをやめたパンがオレの前までやってきて、顔を覗き込んだ。

「いや、別に」

「ブンでよければ何でも相談にのるよーーー まさか@□@・」

「……何だよ」

「恋の悩みか～～へミ～！」二つねえ。パンヒコウサのがあつなが
パンパンヒルヤウモー。」

「いや、違ひし。ホレ、恋なんてしたこともないし、興味とかないから」

これは本当の話。17歳と2ヶ月生きた今でも、恋なんてものはしたことがない。何度か告白をされた事はあるが……すべて断つてきた。

「ええ、つまんない……」

「つまらへね。まあ、で、ヤマモト君だ？」

一応オレ達はフレンド登録をしているので、それぞれがログインしているかいないかを知る事ができる。さつき確かにヤマモトがログインしていたのだが、いつのまにログアウトしたらしかった。

「わがなんないー。どこいつたのかな（？ー？）」

ヤマモトの姿を求めてカメラを動かすと、ドワーフの少女がどこどこからに走ってきた。ちなみに、すべりあるではない。

ピンク色のサイドテールの髪に、体には不釣合いなほど大きな胸

……短めの黄色いスカートのよつなローブをはいており、へそが見えていた。トップスも黄色いシャツでそれが前述の胸によつて窮屈そうなイメージである。

「ヒルトお兄ちゃん～」

少女はオレに向つてソーシャル抱きつくを強要してきた。無論、これを拒否する。

「誰だお前は」

「わざわざ 私の事忘れたやつなんだ……」

デワーフの少女は泣きじゃくり、パンの胸に飛び込んだ。

「よしそー、大丈夫？ ヒルくんのお知り合いなの？」

「うふー、うむ じゃなかつた。セイラ、ヒルトお兄ちゃんのために一生懸命頑張ってきたのにー！」

「はあ？ セイラ？」

デワーフの少女の名前を見ると、セイラ・マスオカといつ名前だった。こんな名前に心当たりは無い。

「セイラ、お兄ちゃんの」と大好きだよ！ だから……お小遣いちょっとだい！」

「お前……わざと失せろ」

「ぬまじやなつづって、きやあー。ブンお姉ちゃん、エルトお兄ちゃんが怖いー……」

「エルくん、ひどこよー@@ IJの子がかわいそうだよ

「ブン、モードをどうか」

ちなみに、ヒーラーにも一つだけ攻撃魔法がある。『ライトブレッヂ』とこう名前で、威力はウイザードのそれとは遠く及ばないが、なによりマシ程度のものだ。

オレの足元に六芒星の魔方陣が発現し、光の塊が目の前の空間から出現すると、それがセイラ・マスオカの体を貫いた。

「ちゅうど、エルくん@@!~.」

「ぬを。ぼくちんのHPが一桁に……ガクブル（。 。 ）」

「ネカマジハは楽しいか？ ヤマモト」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3140z/>

カオス・クロニクル

2011年12月28日22時50分発行